# 授　業　概　要

（介護福祉科）

| | | | |
|---|---|---|---|
| 授業科目名<br>人間の尊厳と自立 | | 授業の種類（ 講義 ・ 演習 ・ 実習 ） | |
| 授業担当者<br>栄　千恵子 | 実務経験 | 神経内科クリニック、教育研究所等で心理カウンセラーとして勤務。 | |
| 授業の回数<br>15 回 | 時間数（単位数）<br>30 時間（２単位） | 配当学年・時期<br>１年・前期 | （ 必修・ 選択 ） |

［授業の目的・ねらい］

人間の多面的理解と尊厳の保持、自立・自律した生活を支える必要性を知ることで、介護場面における倫理的課題について対応できるための基礎となる能力を養う。

［授業全体の内容の概要］

人間の尊厳と自立では、介護福祉を実践するために必要な人間に対する基本的理解を養う。一つは福祉理念の歴史的変遷を学ぶことを通し、人間の尊厳・人権尊重及び権利擁護の考え方を養う。また、本人主体の観点から自立の考え方、自立生活の理解を通しその生活を支える必要性を理解する。

［授業終了時の達成課題（到達目標）］

・「人間」の理解を基礎として、人間としての尊厳の保持と自立・自律した生活を支える必要性について説明することができる。

・介護場面における倫理的課題について課題解決に向けた考察ができる。

［授業の日程と各回のテーマ・内容・授業方法］コマ数

１　人間の尊厳と利用者主体
２　人権思想の潮流とその具現化
３　人権や尊厳に関する日本の諸規定①
４　人権や尊厳に関する日本の諸規定②
５　社会福祉領域での人権・福祉理念の変遷（人は人をどう援助しようとしてきたか）
６　社会福祉領域での人権・福祉理念の変遷（戦後の新たな福祉のあり方への模索）
７　人権尊重と権利擁護①
８　人権尊重と権利擁護②
９　まとめ
１０　自立の概念の多様性
１１　自立とは
１２　介護を必要とする人々の自立と自立支援①
１３　介護を必要とする人々の自立と自立支援②
１４　介護を必要とする人の尊厳の保持と自立、自立支援の関係性
１５　まとめ

| | |
|---|---|
| ［使用テキスト・参考文献］ | ・「最新　介護福祉士養成講座１　第２版　人間の理解」（中央法規出版） |

| | |
|---|---|
| ［単位認定の方法及び基準］ | ・教科出席率が 80%以上の者に対して、以下の配点による総合点を算出し、学内共通の基準による絶対評価を行う。<br>・考査点(100%) |

# 授　業　概　要

（介護福祉科）

| | | | |
|---|---|---|---|
| 授業科目名<br>人間関係とコミュニケーションⅠ | | 授業の種類（ 講義 ・ 演習 ・ 実習 ） | |
| 授業担当者<br>栄　千恵子 | 実務経験 | 神経内科クリニック、教育研究所等で心理カウンセラーとして勤務。 | |
| 授業の回数<br>15 回 | 時間数（単位数）<br>30 時間（２単位） | 配当学年・時期<br>１年・後期 | （ 必修・ 選択 ） |

［授業の目的・ねらい］

対人関係に必要な人間の関係性を理解し、関係形成に必要なコミュニケーションの基礎的な知識・基礎を習得する学習とする。

［授業全体の内容の概要］

人間関係とコミュニケーションの基礎では、自己理解、他者理解をもとに対人関係とコミュニケーションについて理解する。また、コミュニケーションの技法の基礎を学び、組織におけるコミュニケーションについて理解する。

介護の質を高めるために必要な、チームマネジメントの基礎的知識を身につける。チームで働く為に必要なチーム運営の基本を理解する。

［授業終了時の達成課題（到達目標）］

・コミュニケーションの意義、コミュニケーションの様々な方法がわかる。

・「対話する」、「意思の疎通を図る」、「説明責任がある」ということをふまえて、基礎的なコミュニケーション能力を身に付け、実践できる。

［授業の日程と各回のテーマ・内容・授業方法］コマ数

１　人間の誕生と介護の関係
２　自分と他者の理解
３　発達心理学からみた人間関係
４　社会心理学からみた人間関係
５　人間関係とストレス
６　コミュニケーションの概念
７　コミュニケーションの基本構造
８　コミュニケーションの手段
９　対人援助の基本となる人間関係とコミュニケーション
１０　対人援助における基本的態度
１１　援助的人間関係の形成とバイスティックの７つの原則
１２　組織の条件とコミュニケーションの特徴
１３　組織における情報の流れ
１４　組織において求められるコミュニケーション
１５　まとめ

| | |
|---|---|
| ［使用テキスト・参考文献］ | ・「最新　介護福祉士養成講座１　第２版　人間の理解」（中央法規出版） |

| | |
|---|---|
| ［単位認定の方法及び基準］ | ・教科出席率が 80%以上の者に対して、以下の配点による総合点を算出し、学内共通の基準による絶対評価を行う。<br>・考査点(100%) |

# 授　業　概　要

（介護福祉科）

| | | | |
|---|---|---|---|
| 授業科目名<br>社会と制度の理解Ⅰ | | 授業の種類（ 講義 ・ 演習 ・ 実習 ） | |
| 授業担当者<br>伊東　美子 | 実務経験 | 特別養護老人ホームにて、介護福祉士として介護業務に従事する。 | |
| 授業の回数<br>15 回 | 時間数（単位数）<br>30 時間（2 単位） | 配当学年・時期<br>1 年・後期 | （ 必修・ 選択 ） |

［授業の目的・ねらい］

個や集団、社会の単位で人間を理解する視点を養い、生活と社会の関係性を体系的に捉える学習とする。対象者の生活の場としての地域という観点から、地域共生社会や地域包括ケアの知識を学習する。日本の社会保障の考え方、しくみについて理解する。

［授業全体の内容の概要］

個人、家族、地域、社会のしくみと、地域における生活の構造について学び、生活と社会のかかわりや自助、互助、共助、公助の展開について理解できるようにする。地域共生社会や地域包括ケアシステムの基本的な考え方としくみ、その実現のための制度、施策を理解する。社会保障制度の基本的な考え方としくみ、社会保障の現状と課題を理解する。

［授業終了時の達成課題（到達目標）］

生活の基本機能、ライフスタイルの変化、家族、社会・組織、地域、地域社会、地域社会における生活支援、地域福祉の発展、地域共生社会、地域包括ケア、社会保障の考え方、日本の社会保障制度の発達、日本の社会保障制度の仕組みの理解、社会保障制度の課題、について理解できる。

［授業の日程と各回のテーマ・内容・授業方法］コマ数　（15 回までの場合はセル結合）

1. 生活の基本機能
2. ライフスタイルの変化
3. 家族の概念。機能、変容
4. 社会、組織の概念、機能、役割
5. 地域、地域社会の概念、変化
6. 地域社会における生活支援
7. 地域福祉の理念、推進
8. 地域共生社会の理念、取り組み
9. 地域包括ケアの理念、システム
10. 社会保障の役割と意義
11. 国民皆保険、国民皆年金
12. 社会保障関連の法律、社会福祉基礎構造改革
13. 日本の社会保障制度
14. 社会保障制度の課題
15. 前期のまとめ

| | |
|---|---|
| ［使用テキスト・参考文献］ | 最新「介護福祉士養成講座　社会の理解」第 2 版　（中央法規出版） |
| ［単位認定の方法及び基準］ | 教科出席率が 80%以上で、筆記試験 60 点以上 |

# 授　業　概　要

（介護福祉科）

| | | | |
|---|---|---|---|
| 授業科目名<br>生活レクリエーション援助Ⅰ | | 授業の種類（ 講義 ・ 演習 ・ 実習 ） | |
| 授業担当者<br>須藤　ひろみ | 実務経験 | 専門学校レクリエーション講師、長岡市介護予防運動指導員として、レクリエーションに従事している。 | |
| 授業の回数<br>15 回 | 時間数（単位数）<br>30 時間（２単位） | 配当学年・時期<br>１年・前期 | （ 必修・ 選択 ） |

［授業の目的・ねらい］

・介護実践におけるレクリエーション活動の意義を知り、実践に向けた計画を立てることができるようになる。

［授業全体の内容の概要］

・介護実践におけるレクリエーション活動の意義を学び、実践に向けた計画を立てることができるように授業の中で学ぶ。

［授業終了時の達成課題（到達目標）］

・レクリエーション活動の社会的意義を理解し、支援活動の必要性を考えられる。

・レクリエーション事業の計画・実践・評価についての力を養うこができる。

［授業の日程と各回のテーマ・内容・授業方法］コマ数

１　レクリエーションの主旨・支援の目的
２　レクリエーションインストラクターの役割
３　心の元気づくりの仕組み
４　ライフステージと心の元気づくり
５　地域の絆づくりと元気づくり
６　レクリエーション支援の理論①～信頼関係づくり～
７　レクリエーション支援の理論②～良好な集団づくり～
８　レクリエーション支援の理論③～集団内のコミュニケーションの促進～
９　レクリエーション支援の理論④～自主的・主体的に楽しむ力を育む～
１０　レクリエーション支援の方法①～ホスピタリティ①～
１１　レクリエーション支援の方法②～ホスピタリティ②～
１２　レクリエーション支援の方法③～アイスブレーキング①～
１３　レクリエーション支援の方法④～アイスブレーキング②～
１４　レクリエーション支援の方法⑤～相互作用を促進するコミュニケーション技術～
１５　まとめ

| | |
|---|---|
| ［使用テキスト・参考文献］ | ・「楽しさをとおした心の元気づくり～レクリエーション支援の理論と方法」（日本レクリエーション協会） |
| ［単位認定の方法及び基準］ | ・教科出席率が 80%以上の者に対して、以下の配点による総合点を算出し、学内共通の基準による絶対評価を行う。<br>・考査点(100%) |

# 授　業　概　要

（介護福祉科）

| | | | |
|---|---|---|---|
| 授業科目名<br>生活レクリエーション援助Ⅱ | | 授業の種類（　講義　・　演習　・　実習　） | |
| 授業担当者<br>須藤　ひろみ | 実務経験 | 専門学校レクリエーション講師、長岡市介護予防運動指導員として、レクリエーションに従事している。 | |
| 授業担当者<br>星島　宏治 | 実務経験 | 自営業でバルーンアート職人として従事している。 | |
| 授業の回数<br>15 回 | 時間数（単位数）<br>30 時間（２単位） | 配当学年・時期<br>１年・後期 | （　必修・　選択　） |

［授業の目的・ねらい］

・介護実践におけるレクリエーション活動の意義を知り、実践に向けた計画を立案し、実践できるようになる。そのためにコミュニケーションをとる能力や方法を習得し、目的に合わせたレクリエーションの選択・展開方法について学習する。

［授業全体の内容の概要］

・介護実践におけるレクリエーション活動の意義を知り、実践に向けた計画を立案し、実践できる力を学ぶ。そのためにコミュニケーションをとる能力や方法を習得し、目的に合わせたレクリエーションの選択・展開方法について学ぶ。

［授業終了時の達成課題（到達目標）］

1. 個人及び集団に適したコミュニケーション方法が選択できる。
2. 対象・目的に合わせたレクリエーションを計画、展開、実践できる。

［授業の日程と各回のテーマ・内容・授業方法］コマ数

【コミュニケーションワーク】　　１～14　須藤ひろみ

１　アイスブレーキング
２　ホスピタリティ
３　表現

【目的に合わせたレクリエーション・ワーク】

４　介護予防①
５　介護予防②
６　認知症予防

【対象に合わせたレクリエーション・ワーク】

７　こどもの遊び
８　昔の遊び（集団）
９　高齢者の遊び（個人）

【実習Ⅰ-1 事前準備】

１０　計画書の作成①
１１　計画書の作成②
１２　事前準備
１３　リハーサル①
１４　リハーサル②

| 【バルーンアート演習】　　15　星島宏治<br>１５．バルーンアート | |
|---|---|
| ［使用テキスト・参考文献］ | ・「楽しさをとおした心の元気づくり～レクリエーション支援の理論と方法」（日本レクリエーション協会）<br>・プリント資料配布 |
| ［単位認定の方法及び基準］ | ・教科出席率が 80%以上の者に対して、以下の配点による総合点を算出し、学内共通の基準による絶対評価を行う。<br>・考査点(100%) |

# 授　業　概　要

（介護福祉科）

| | | | |
|---|---|---|---|
| 授業科目名<br>介護の基本Ⅰ-1 | | 授業の種類（ 講義 ・ 演習 ・ 実習 ） | |
| 伊東　美子 | 実務経験 | 特別養護老人ホームにて、介護福祉士として介護業務に従事する。 | |
| 授業の回数<br>15 回 | 時間数（単位数）<br>30 時間（２単位） | 配当学年・時期<br>1 年・前期 | （ 必修・ 選択 ） |

［授業の目的・ねらい］

介護福祉の基本となる理念や、地域を基盤とした生活の継続性を支援するためのしくみを理解し、介護福祉の専門職としての能力と態度を養う学習とする。

［授業全体の内容の概要］

複雑化、多様化、高度化する介護ニーズ及び介護福祉を取り巻く状況を社会的な課題と捉え、尊厳の保持や自立支援という介護福祉の基本となる理念を理解する。

地域や施設、在宅の場、介護予防や看取り、災害時等の場面や状況における、介護福祉士の役割と機能を理解する。

［授業終了時の達成課題（到達目標）］

社会の変化と介護福祉の歴史、介護の社会化、介護福祉の基本理念、介護福祉士の定義・機能と役割、について理解できる。

［授業の日程と各回のテーマ・内容・授業方法］コマ数　（15 回までの場合はセル結合）

1. 介護福祉を取り巻く状況
2. 介護福祉の歴史①（老人福祉法制定に至るまでの政策・1970 年代・1980 年代）
3. 介護福祉の歴史②（1990 年代・2000 年代以降）
4. 介護福祉の理念・尊厳を支える介護
5. 自立を支える介護
6. 社会福祉士及び介護福祉士法
7. 社会福祉士及び介護福祉士法に関連する諸規定
8. 介護福祉士の活躍の場と役割①（地域ケアシステム・介護予防）
9. 介護福祉士の活躍の場と役割②（医療的ケア・人生最終段階への支援）
10. 介護福祉士の活躍の場と役割③（災害時の支援）
11. 介護福祉士養成教育のはじまり・社会福祉専門職に求められる役割の拡大
12. 介護福祉現場での中心的役割としての介護福祉士への期待・チームリーダーとしての介護福祉士への期待
13. 介護福祉士を支える団体①（日本介護福祉士会・日本介護福祉士養成施設協会）
14. 介護福祉士を支える団体②（日本介護福祉）教育学会・日本介護福祉学会
15. まとめ

| | |
|---|---|
| ［使用テキスト･参考文献］ | 最新「介護福祉士養成講座　介護の基本Ⅰ」第 2 版<br>(中央法規出版)<br>プリント配布 |

| | |
|---|---|
| ［単位認定の方法及び基準］ | ・教科出席率が 80%以上で、筆記試験 60 点以上 |

# 授　業　概　要

（介護福祉科）

| | | | |
|---|---|---|---|
| 授業科目名<br>介護の基本Ⅰ-2 | | 授業の種類（ 講義 ・ 演習 ・ 実習 ） | |
| 授業担当者<br>伊東　美子 | 実務経験 | 特別養護老人ホームにて、介護福祉士として介護業務に従事する。 | |
| 授業の回数<br>30 回 | 時間数（単位数）<br>60 時間（4 単位） | 配当学年・時期<br>1 年・後期 | （ 必修・ 選択 ） |

［授業の目的・ねらい］

介護福祉の基本となる理念や、地域を基盤とした生活の継続性を支援するためのしくみを理解し、介護福祉の専門職としての能力と態度を養う学習とする。

［授業全体の内容の概要］

介護福祉の専門性と倫理を理解し、介護福祉士に求められる専門職としての態度を養う。
ICF の視点に基づくアセスメントを理解し、エンパワメントの観点から個々の状態に応じた自立を支援するための環境整備や介護予防、リハビリテーションの意義や方法を理解できる。

［授業終了時の達成課題（到達目標）］

介護福祉の職能団体、専門職の倫理、自立支援、介護予防、リハビリテーションと介護福祉、ICF の考え方、について理解できる。

［授業の日程と各回のテーマ・内容・授業方法］コマ数　（15 回までの場合はセル結合）

| | |
|---|---|
| １．介護福祉士の倫理①（介護実践での倫理） | １６．リハビリテーションとは |
| ２．介護福祉士の倫理② | １７．障害の理解と評価 |
| ３．介護福祉士の倫理③（事例検討） | １８．リハビリテーションにおける介護福祉士の役割 |
| ４．介護福祉士の倫理④（事例検討） | １９．リハビリテーションの理念（演習） |
| ５．日本介護福祉士会の倫理綱領① | ２０．介護予防の概要 |
| ６．日本介護福祉士会の倫理綱領② | ２１．介護予防の種類と展開 |
| ７．日本介護福祉士会の倫理綱領③ | ２２．高齢者の身体特性と介護予防 |
| ８．倫理関係のまとめ | ２３．自立支援と介護予防 |
| ９．介護福祉における自立支援① | ２４．介護予防における介護福祉士の役割① |
| １０．介護福祉における自立支援② | ２５．介護予防における介護福祉士の役割② |
| １１．介護福祉における自立支援③ | ２６．まとめ |
| １２．ICF の考え方① | ２７．まとめ |
| １３．ICF の考え方②（事例） | ２８．まとめ |
| １４．ICF の考え方③（事例） | ２９．まとめ |
| １５．ICF の考え方④（事例） | ３０．まとめ |

| | |
|---|---|
| ［使用テキスト・参考文献］ | 最新「介護福祉士養成講座　介護の基本Ⅰ」第 2 版　（中央法規出版） |
| ［単位認定の方法及び基準］ | ・教科出席率が 80％以上で、筆記試験 60 点以上 |

# 授　業　概　要

（介護福祉科）

| | | | |
|---|---|---|---|
| 授業科目名<br>コミュニケーション技術Ⅰ | | 授業の種類（ 講義 ・ 演習 ・ 実習 ） | |
| 授業担当者<br>高橋　雅幸 | 実務経験 | 特別養護老人ホームにて、介護福祉士として介護業務に従事する。 | |
| 授業の回数<br>１５回 | 時間数（単位数）<br>３０時間（２単位） | 配当学年・時期<br>１年・前期 | （ 必修・ 選択 ） |

［授業の目的・ねらい］

介護を必要とする者の理解や援助的関係、援助的コミュニケーションについて理解するとともに、利用者や利用者家族、あるいは多職種協働おけるコミュニケーション能力を身につけるための学習とする。

［授業全体の内容の概要］

コミュニケーション技術では、人間関係とコミュニケーションで学ぶコミュニケーションの基礎的な知識を基盤に、本人及び家族とのよりよい関係性の構築や障害の特性に応じたコミュニケーションの基本的な知識・技術を習得する。介護におけるチームのコミュニケーションについて、情報共有の意義、活用、管理などに関する基本知識・技術を習得する。

［授業終了時の達成課題（到達目標）］

・介護現場で必要とされる人間関係の形成のためのコミュニケーション技術を理解し、利用者にかかわる人たちと利用者の関係調整能力を習得できる。
・コミュニケーション障害のある利用者を理解する視点を学び、それに対する適切なコミュニケーションが実践できる。
・文書（記録・報告書など）を通して、介護実践に必要とされる情報伝達技術を習得する。

［授業の日程と各回のテーマ・内容・授業方法］コマ数

１　オリエンテーション　介護におけるコミュニケーションの意義・目的
２　介護におけるコミュニケーションの展開過程
３　介護におけるコミュニケーションの対象
４　援助関係の特徴
５　援助関係を構築するための原則（バイステックの７原則）①
６　援助関係を構築するための原則（バイステックの７原則）②
７　コミュニケーション態度に関する基本技術（傾聴・受容・共感）①
８　コミュニケーションにおける距離、言語・非言語・準言語コミュニケーション
９　目的別コミュニケーション（動機づけ・ものの見方）
１０　集団におけるコミュニケーション技術
１１　コミュニケーション障害について
１２　障害の特性に応じたコミュニケーション-視覚障害・聴覚障害のある人への支援①
１３　障害の特性に応じたコミュニケーション-構音障害・失語症の人への支援
１４　障害の特性に応じたコミュニケーション-認知症の人への支援
１５　障害の特性に応じたコミュニケーション-うつ病・抑うつ状態の人への支援　まとめ

| | |
|---|---|
| ［使用テキスト・参考文献］ | ・「最新・介護福祉士養成講座５<br>　　コミュニケーション技術　第２版」（中央法規出版）<br>・プリント配布 |
| ［単位認定の方法及び基準］ | ・教科出席率が 80%以上の者に対して、以下の配点による総合点を算出し、学内共通の基準による絶対評価を行う。<br>・考査点(100%) |

# 授　業　概　要

（介護福祉科）

| | | | |
|---|---|---|---|
| 授業科目名<br>コミュニケーション技術Ⅱ | | 授業の種類（ 講義 ・ 演習 ・ 実習 ） | |
| 授業担当者<br>高橋　雅幸 | 実務経験 | 特別養護老人ホームにて、介護福祉士として介護業務に従事する。 | |
| 授業の回数<br>１５回 | 時間数（単位数）<br>３０時間（２単位） | 配当学年・時期<br>１年・後期 | （ 必修・ 選択 ） |

［授業の目的・ねらい］

介護を必要とする者の理解や援助的関係､援助的コミュニケーションについて説明ができ、利用者や利用者家族、あるいは多職種協働おけるコミュニケーション能力について述べることができる。

［授業全体の内容の概要］

コミュニケーション技術では、人間関係とコミュニケーションで学ぶコミュニケーションの基礎的な知識を基盤に、本人及び家族とのよりよい関係性の構築や障害の特性に応じたコミュニケーションの基本的な知識・技術を習得する。介護におけるチームのコミュニケーションについて、情報共有の意義、活用、管理などに関する基本知識・技術を習得する。

［授業終了時の達成課題（到達目標)］

・介護現場で必要とされる人間関係の形成のためのコミュニケーション技術を説明でき利用者にかかわる人たちと利用者の関係調整能力について述べることができる。

・コミュニケーション障害のある利用者について説明ができ、それに対する適切なコミュニケーションを実施できる。

・文書（記録・報告書など）を通して、介護実践に必要とされる情報伝達技術について説明ができ、実施することができる。

［授業の日程と各回のテーマ・内容・授業方法］コマ数

１　障害の特性に応じたコミュニケーションー統合失調症・知的障害の人への支援
２　障害の特性に応じたコミュニケーションー発達障害のある人への支援
３　障害の特性に応じたコミュニケーションー高次脳機能障害のある人への支援
４　障害の特性に応じたコミュニケーションー重症心身障害のある人への支援
５　家族との関係づくり（家族と協働関係の構築）
６　家族を支援する視点
７　家族関係と介護ストレスへの対応
８　チームにおけるコミュニケーションの意義・目的
９　報告・連絡・相談
１０　記録の意義・目的①
１１　記録の種類（演習）
１２　会議・議事進行
１３　事例検討を行う意義・目的・技術
１４　情報の活用と管理（ICT の活用）
１５　まとめ

| | |
|---|---|
| ［使用テキスト・参考文献］ | ・「最新・介護福祉士養成講座　５　第２版<br>　コミュニケーション技術」<br>（中央法規出版）<br>・プリント配布 |
| ［単位認定の方法及び基準］ | ・教科出席率が 80%以上の者に対して、以下の配点による総合点を算出し、学内共通の基準による絶対評価を行う。<br>・考査点(100%) |

# 授　業　概　要

（介護福祉科）

| | | | |
|---|---|---|---|
| 授業科目名<br>生活支援技術Ⅰ－1 | | 授業の種類（ 講義 ・ 演習 ・ 実習 ） | |
| 授業担当者<br>佐藤　由香 | 実務経験 | 介護福祉士や介護支援専門員の業務、講師としての業務に従事する。 | |
| 授業の回数<br>１５回 | 時間数（単位数）<br>３０時間（２単位） | 配当学年・時期<br>１年・前期 | （ 必修・ 選択 ） |

［授業の目的・ねらい］

尊厳の保持の観点から、どのような状態であっても、その人の自立・自律を尊重し、潜在能力を引き出し、見守ることも含めた適切な介護技術を用いて、安全に援助できるように説明ができ、実施ができる。

［授業全体の内容の概要］

生活支援技術では、ＩＣＦの視点を生活支援に活かすことの意義を理解し、自立に向けた居住環境、移動、身支度、食事、入浴・清潔保持、排せつ、家事、休息・睡眠、人生の最終段階における介護、福祉用具の意義と活用について基礎的な知識・技術を学ぶ。

［授業終了時の達成課題（到達目標）］

・介護福祉士として実務につくための基本的な介護の知識・技術・態度を習得し、それらを統合して適切に実施できる。

［授業の日程と各回のテーマ・内容・授業方法］コマ数　（15 回までの場合はセル結合）

１　生活支援とは何か・その人らしさ
２　生活支援のポイント
３　生活支援と介護過程
４　利用者の生活を理解する
５　生活支援におけるチームアプローチ
６　住まいの役割と機能
７　生活行為と生活空間
８　加齢と生活空間
９　快適な生活空間
１０　安全に暮らすための生活環境（住宅内事故）
１１　居住環境の整備における多職種の連携
１２　福祉用具の意義・活用、介護ロボット
１３　福祉用具の種類①（介護保険法）
１４　福祉用具の種類②（障害者総合支援法）
１５　適切な福祉用具を選ぶための視点・まとめ

| | |
|---|---|
| ［使用テキスト・参考文献］ | ・最新　介護福祉士養成講座６　生活支援技術Ⅰ　第２版」（中央法規出版） |

| | |
|---|---|
| ［単位認定の方法及び基準］ | ・教科出席率が 80%以上の者に対して、以下の配点による総合点を算出し、学内共通の基準による絶対評価を行う。<br>１．考査点(100%) |

# 授　業　概　要

（介護福祉科）

| | | | |
|---|---|---|---|
| 授業科目名<br>生活支援技術Ｉ－２ | | 授業の種類（ 講義 ・ 演習 ・ 実習 ） | |
| 授業担当者<br>佐藤　由香 | 実務経験 | 介護福祉士や介護支援専門員の業務、講師としての業務に従事する。 | |
| 授業の回数<br>１５回 | 時間数（単位数）<br>３０時間（２単位） | 配当学年・時期<br>１年・後期 | （ 必修・ 選択 ） |

［授業の目的・ねらい］

尊厳の保持の観点から、どのような状態であっても、その人の自立・自律を尊重し、潜在能力を引き出し、見守ることも含めた適切な介護技術を用いて、安全に援助できるように説明ができ、実施ができる。

［授業全体の内容の概要］

生活支援技術では、ＩＣＦの視点を生活支援に活かすことの意義を理解し、自立に向けた居住環境、移動、身支度、食事、入浴・清潔保持、排せつ、家事、休息・睡眠、人生の最終段階における介護、福祉用具の意義と活用について基礎的な知識・技術を学ぶ。

［授業終了時の達成課題（到達目標）］

・介護福祉士として実務につくための基本的な介護の知識・技術・態度を習得し、それらを統合して適切に実施できる。

［授業の日程と各回のテーマ・内容・授業方法］コマ数

１．自立生活を支える家事
２．自立に向けた家事の介護①（調理・洗濯・そうじ）
３．自立に向けた家事の介護②（衣類・裁縫）裁縫演習①
４．自立に向けた家事の介護③（衣類・裁縫）裁縫演習②
５．自立に向けた家事の介護④（衣類・裁縫）裁縫演習③
６．自立に向けた家事の介護⑤（買い物・家庭経営・家計の管理）
７．家事の介護における多職種連携の必要性
８．応急手当について
９．応急手当の実際①（骨折部の三角巾での固定演習を含む）
１０．応急手当の実際②（救急車の手配など演習含む）
１１．災害時における生活支援
１２．生活支援の重要性
１３．支援者としてのありかた
１４．被災地における活動場所
１５．災害時における生活支援

| | |
|---|---|
| ［使用テキスト・参考文献］ | ・「最新　介護福祉士養成講座６　生活支援技術Ｉ　第２版」（中央法規出版） |

| | |
|---|---|
| ［単位認定の方法及び基準］ | ・教科出席率が 80%以上の者に対して、以下の配点による総合点を算出し、学内共通の基準による絶対評価を行う。<br>１．考査点(100%) |

# 授　業　概　要

（介護福祉科）

| | | |
|---|---|---|
| 授業科目名<br>生活支援技術Ⅱ―１ | | 授業の種類（　講義　・　演習　・　実習　） |
| 授業担当者<br>高橋　良子 | 実務経験 | 老人保健施設、社会福祉協議会、認知症対応型グループホームにて介護業務に従事する |
| 授業担当者<br>小林　恵太 | 実務経験 | 有料老人ホーム・老人保健施設にて介護業務に従事する |
| 授業担当者<br>山岸　涼子 | 実務経験 | 特別養護老人ホーム、訪問入浴、訪問介護員として介護福祉士業務に従事する。 |

| | | | |
|---|---|---|---|
| 授業の回数<br>４０回 | 時間数（単位数）<br>８０時間（３単位） | 配当学年・時期<br>１年・前期 | （　必修・　選択　） |

［授業の目的・ねらい］

尊厳の保持や自立支援、生活の豊かさの観点から本人主体の生活が維持できるよう、根拠に基づいた介護実践を行うための知識・技術を習得する。

［授業全体の内容の概要］

ＩＣＦの視点を生活支援に活かすことの意義を理解し、自立に向けた居住環境、移動、身支度、食事、入浴、清潔保持、排泄、家事、休息、睡眠、人生の最終段階における介護、福祉用具の意義と活用について基礎的な知識や技術を学ぶ。

［授業終了時の達成課題（到達目標）］

① 対象者の能力を活用・発揮し、自立支援のための居住環境の整備について基礎的な知識が理解できる

② 生活の継続性を支援する観点から、対象者が個々の状態に応じた家事を自立的に行うことを支援するための、基礎的な知識や技術を習得できるようにする。

［授業の日程と各回のテーマ・内容・授業方法］コマ数　（15 回までの場合はセル結合）

| | |
|---|---|
| 1. オリエンテーション | 21. 自立に向けた入浴・清潔保持 |
| 2. 睡眠における介護技術（ベッドメイキング） | 22. 入浴確認テスト　入浴実習まとめ |
| 3. 睡眠における介護技術（ベッドメイキング） | 23. 自立に向けた食事介助（食事の意義） |
| 4. 睡眠における介護技術（ベッドメイキング） | 24. 自立に向けた食事介助（食事介助の実際） |
| 5. ベッドメイキング確認テスト | 25. 自立に向けた食事介助（食事介助の実際） |
| 6. 自立に向けた移動の意義（姿勢の名称） | 26. 自立に向けた排泄介助（意義・目的） |
| 7. 自立に向けた移動の意義（起き上がり） | 27. 自立に向けた排泄介助（ポータブルトイレ） |
| 8. 自立に向けた移動の意義（車いすの操作） | 28. 自立に向けた排泄介助（ポータブルトイレ） |
| 9. 自立に向けた移動の意義（車いすの操作） | 29. 自立に向けた排泄介助（トイレ） |
| 10. 自立に向けた移動の意義（歩行介助） | 30. 自立に向けた排泄介助（パッド交換） |
| 11. 自立に向けた移動の意義（歩行介助） | 31. 自立に向けた排泄介助（尿器・差し込み便器） |
| 12. 移動動作に関する確認テスト | 32. おむつでの排泄介助 |
| 13. 身じたくの介助（衣類の着脱）前開き | 33. おむつでの排泄介助 |
| 14. 身じたくの介助（衣類の着脱）前開き | 34. 排泄介助確認テスト（おむつ） |
| 15. 身じたくの介助（衣類の着脱）かぶり | 35. 排泄介助確認テスト（おむつ） |
| 16. 身じたくの介助（衣類の着脱）かぶり | 36. 頻尿・尿失禁・便秘・下痢・便失禁への対応 |

| | |
|---|---|
| 17. 着脱介助確認テスト<br>18. 自立に向けた入浴・清潔保持<br>19. 自立に向けた入浴・清潔保持<br>20. 自立に向けた入浴・清潔保持 | 37. 前期分復習<br>38. 前期分復習<br>39. 前期分復習<br>40. 前期分復習 |

| | |
|---|---|
| ［使用テキスト・参考文献］ | 最新　介護福祉士養成講座６　生活支援技術Ⅰ　第２版<br>最新　介護福祉士養成講座７　生活支援技術Ⅱ　第２版<br>中央法規出版 |
| ［単位認定の方法及び基準］ | ・教科出席率が 80%以上の者に対して、以下の配点による総合点を算出し、学内共通の基準による絶対評価を行う。<br>１．考査点(100%) |

# 授　業　概　要

（介護福祉科）

| | | |
|---|---|---|
| 授業科目名<br>生活支援技術Ⅱ―２ | | 授業の種類（　講義　・　演習　・　実習　） |
| 授業担当者<br>高橋　良子 | 実務経験 | 老人保健施設、社会福祉協議会、認知症対応型グループホームにて介護業務に従事する |
| 授業担当者<br>小林　恵太 | 実務経験 | 有料老人ホーム・老人保健施設にて介護業務に従事する |
| 授業担当者<br>山岸　涼子 | 実務経験 | 特別養護老人ホーム、訪問入浴、訪問介護員として介護福祉士業務に従事する。 |

| | | | |
|---|---|---|---|
| 授業の回数<br>２０回 | 時間数（単位数）<br>４０時間（２単位） | 配当学年・時期<br>１年・後期 | （　必修・　選択　） |

［授業の目的・ねらい］

尊厳の保持や自立支援、生活の豊かさの観点から本人主体の生活が維持できるよう、根拠に基づいた介護実践を行うための知識・技術を習得する。

［授業全体の内容の概要］

ＩＣＦの視点を生活支援に活かすことの意義を理解し、自立に向けた居住環境、移動、身支度、食事、入浴、清潔保持、排泄、家事、休息、睡眠、人生の最終段階における介護、福祉用具の意義と活用について基礎的な知識や技術を学ぶ。

［授業終了時の達成課題（到達目標）］

① 対象者の能力を活用・発揮し、自立支援のための居住環境の整備について基礎的な知識が理解できる

② 生活の継続性を支援する観点から、対象者が個々の状態に応じた家事を自立的に行うことを支援するための、基礎的な知識や技術を習得できるようにする。

［授業の日程と各回のテーマ・内容・授業方法］コマ数　（15 回までの場合はセル結合）

| | |
|---|---|
| 1.　臥床状態でのシーツ交換 | 11. 口腔ケア① |
| 2.　臥床状態でのシーツ交換 | 12. 口腔ケア② |
| 3.　臥床状態でのシーツ交換確認テスト | 13. 休息・睡眠の介護① |
| 4.　臥床状態での着脱介助（前開き衣類） | 14. 休息・睡眠の介護② |
| 5.　臥床状態での着脱介助（前開き衣類） | 15. 終末期のケア① |
| 6.　臥床状態での着脱介助（浴衣） | 16. 終末期のケア② |
| 7.　臥床状態での着脱介助（浴衣） | 17. 終末期のケア③(エンゼルケア) |
| 8.　臥床状態での衣類・シーツ交換確認テスト | 18. 終末期のケア④（エンゼルケア） |
| 9.　臥床状態での衣類・シーツ交換確認テスト | 19. 終末期ケア（安楽とは何か）確認テスト |
| 10. 利用者の状態に応じた介助 | 20. まとめ |

| | |
|---|---|
| ［使用テキスト・参考文献］ | 最新　介護福祉士養成講座７　生活支援技術Ⅰ　Ⅱ　第２版<br>中央法規出版 |
| ［単位認定の方法及び基準］ | ・教科出席率が 80%以上の者に対して、以下の配点による総合点を算出し、学内共通の基準による絶対評価を行う。<br>１．考査点(100%) |

# 授　業　概　要

（介護福祉科）

| | | | |
|---|---|---|---|
| 授業科目名<br>介護過程Ⅰ―1 | | 授業の種類（ 講義 ・ 演習 ・ 実習 ） | |
| 授業担当者<br>高橋　良子 | 実務経験 | 老人保健施設、社会福祉協議会、認知症対応型グループホームにて介護業務に従事する。 | |
| 授業の回数<br>15 回 | 時間数（単位数）<br>30 時間（２単位） | 配当学年・時期<br>１年・前期 | （ 必修・ 選択 ） |

［授業の目的・ねらい］

本人の望む生活の実現に向けて、生活課題の分析を行い、根拠に基づく介護実践を伴う課題解決の思考過程を習得する学習とする。

［授業全体の内容の概要］

介護過程の意義・目的及び介護過程の展開の一連のプロセスに関する基礎的理解、介護過程とチームアプローチ、個別事例に通じた介護過程の展開の実際について、介護総合演習や介護実習、生活支援技術等の他科目との連動を視野に入れて、介護過程を展開できる能力を養う。

［授業終了時の達成課題（到達目標）］

① 介護過程の意義・目的が理解できる
② 介護過程の展開のプロセスが理解できる
③ 情報収集の目的や意義が理解できる
④ 利用者の状態に合わせた情報収集が実践できる
⑤ 情報収集の実践から、観察力や洞察力を身に付けることができる

［授業の日程と各回のテーマ・内容・授業方法］コマ数　（15 回までの場合はセル結合）

１　介護過程とは何か―意義・目的・全体像　　共通項を探す（演習）①
２　共通項を探す（演習・発表）②
３　事例検討の必要性①（演習）
４　事例検討の必要性②（演習）
５　アセスメント
６　介護計画の立案
７　介護の実施
８　評価
９　介護過程の展開（アセスメント・情報収集）①
１０　介護過程の展開（アセスメント・解釈、関連付け、統合化）②
１１　情報収集シートの作成(演習)①
１２　情報収集シートの作成(演習)②
１３　情報収集シートの作成(演習)③
１４　情報収集シートの作成(演習)④
１５　情報収集シートの作成(演習)⑤

| | |
|---|---|
| ［使用テキスト・参考文献］ | ・「最新　介護福祉士養成講座９　介護過程」　第２版<br>中央法規出版 |
| ［単位認定の方法及び基準］ | ・教科出席率が 80%以上の者に対して、以下の配点による総合点を算出し、学内共通の基準による絶対評価を行う。<br>１．考査点(100%) |

# 授　業　概　要

（介護福祉科）

<table>
<tr><td colspan="3">授業科目名<br>介護過程Ⅰ―２</td><td colspan="3">授業の種類（ 講義 ・ 演習 ・ 実習 ）</td></tr>
<tr><td colspan="2">授業担当者<br>高橋　良子</td><td>実務経験</td><td colspan="3">老人保健施設、社会福祉協議会、認知症対応型グループホームにて介護業務に従事する。</td></tr>
<tr><td>授業の回数<br>15 回</td><td colspan="2">時間数（単位数）<br>30 時間（２単位）</td><td>配当学年・時期<br>１年・後期</td><td colspan="2">（ 必修・ 選択 ）</td></tr>
<tr><td colspan="6">［授業の目的・ねらい］<br>本人の望む生活の実現に向けて、生活課題の分析を行い、根拠に基づく介護実践を伴う課題解決の思考過程を習得する学習とする。<br>［授業全体の内容の概要］<br>介護過程の意義・目的及び介護過程の展開の一連のプロセスに関する基礎的理解、介護過程とチームアプローチ、個別事例に通じた介護過程の展開の実際について、介護総合演習や介護実習、生活支援技術等の他科目との連動を視野に入れて、介護過程を展開できる能力を養う。<br><br>［授業終了時の達成課題（到達目標）］<br>① アセスメントの意味と方法が理解できる<br>② アセスメントから、利用者の生活課題が導きだせることができる<br>③ 利用者に適切な方法を用いてアセスメントができる<br>④ アセスメントした内容が理解できる</td></tr>
<tr><td colspan="6">［授業の日程と各回のテーマ・内容・授業方法］コマ数　（15 回までの場合はセル結合）</td></tr>
<tr><td colspan="6">1　介護過程の展開（介護計画の立案）<br>2　介護過程の展開（介護の実施）<br>3　介護過程の展開（評価）<br>4　介護過程の実践的展開（事例）①<br>5　介護過程の実践的展開（事例）②<br>6　介護過程の実践的展開（事例）③<br>7　ケアマネジメントの全体像<br>8　チームアプローチの意義<br>（介護福祉士の役割<br>9</td></tr>
<tr><td colspan="2">［使用テキスト・参考文献］</td><td colspan="4">・「最新　介護福祉士養成講座９　介護過程　」第２版<br>中央法規出版</td></tr>
<tr><td colspan="2">［単位認定の方法及び基準］</td><td colspan="4">・教科出席率が 80％以上の者に対して、以下の配点による総合点を算出し、学内共通の基準による絶対評価を行う。<br>１．考査点(100％)</td></tr>
</table>

# 授　業　概　要

（介護福祉科）

| | | | |
|---|---|---|---|
| 授業科目名<br>介護総合演習Ⅰ－1 | | 授業の種類（ 講義 ・ 演習 ・ 実習 ） | |
| 授業担当者<br>山岸　涼子 | 実務経験 | 特別養護老人ホーム、訪問入浴、訪問介護員として介護福祉士業務に従事する。 | |
| 授業の回数<br>15 回 | 時間数（単位数）<br>30 時間（1 単位） | 配当学年・時期<br>1 年・前期 | （ 必修・ 選択 ） |

［授業の目的・ねらい］

介護実習に向けて心構え、予備知識、動機づけ等の準備を行い、介護実習中には実践力を身に着けることができるようにし、実習後は十分な振り返りを行うことでより効果的な介護実習を行えるようにする。

［授業全体の内容の概要］

介護実習の意義、実習Ⅰの位置づけを学習する。

介護事業所の概要、利用者の生活、介護福祉士としての役割について学習し、実習ごとの目的をきちんと踏まえたうえで自分の目標を明確にできるようにする。実習前に学内で学んだ知識・技術について再確認し実習に臨ませる。

［授業終了時の達成課題（到達目標）］

①学んだ知識や技術などを統合して、実際場面に適用できる能力を身につける。

②介護場面で遭遇した課題を解決するための思考、判断、行動力を身につける。

③コミュニケーション技術などを活用し、様々な人との人間関係を築く能力を身につける。

［授業の日程と各回のテーマ・内容・授業方法］コマ数　（15 回までの場合はセル結合）

1　実習についての説明（実習要綱の説明）
2　実習施設の概要（通所介護・小規模多機能型居宅介護・グループホーム）
3　実習施設の概要（特別養護老人ホーム・介護老人保健施設・障害者支援施設）
4　実習施設の概要（発表）
5　実習の方法、心構え、注意点などの説明
6　実習記録の書き方①
7　実習記録の書き方②
8　実習個人票の作成
9　実習計画の作成①
１０　実習計画の作成②
１１　実習記録類の配布・説明　　実習先の概要を調べる
１２　実習の進め方・スケジュール作成
１３　実習前準備

| | |
|---|---|
| １４　実習前準備<br>１５　実習前準備 | |
| ［使用テキスト・参考文献］ | ・「最新　介護福祉士養成講座１０　第２版<br>介護総合演習」(中央法規出版)<br>・プリント配布 |
| ［単位認定の方法及び基準］ | ・教科出席率が 80%以上の者に対して、以下の配点による総合点を算出し、学内共通の基準による絶対評価を行う。<br>・考査点(100%) |

# 授　業　概　要

（介護福祉科）

| | | | |
|---|---|---|---|
| 授業科目名<br>介護総合演習Ｉ－２ | | 授業の種類（ 講義 ・ 演習 ・ 実習 ） | |
| 授業担当者<br>山岸　涼子 | 実務経験 | 特別養護老人ホーム、訪問入浴、訪問介護員として介護福祉士業務に従事する。 | |
| 授業の回数<br>15 回 | 時間数（単位数）<br>30 時間（１単位） | 配当学年・時期<br>１年・後期 | （ 必修・ 選択 ） |

［授業の目的・ねらい］

介護実習に向けて心構え、予備知識、動機づけ等の準備を行い、介護実習中には実践力として実施し、実習後は十分な振り返りを行うことでより効果的な介護実習を次回実施できるようにする。

［授業全体の内容の概要］

介護実習の意義、実習Ｉの位置づけを学習する。

介護事業所の概要、利用者の生活、介護福祉士としての役割について学習し、実習ごとの目的をきちんと踏まえたうえで自分の目標を明確にできるようにする。実習前に学内で学んだ知識・技術について再確認し実習に臨ませる。

［授業終了時の達成課題（到達目標）］

①学んだ知識や技術などを統合して、実際場面において説明できる。

②介護場面で遭遇した課題を解決するために推論し、判断し、それを実施する。

③様々な人との人間関係を構築するために、コミュニケーション技術などを活用し、表現することができる。

［授業の日程と各回のテーマ・内容・授業方法］コマ数　（15 回までの場合はセル結合）

１　Ｉ－１　Ｉ－２オリテ後の内容確認
２　Ｉ－１　Ｉ－２実習前の確認①
３　実習記録まとめ
４　実習記録まとめ
５　Ｉ－１　Ｉ－２実習前の確認②
６　実習記録まとめ
７　実習記録まとめ
８　Ｉ－３実習の説明・概要・計画書作成
９　Ｉ－３準備
１０　Ｉ－３実習前指導
１１　実習記録まとめ
１２　実習記録まとめ

| | |
|---|---|
| １３　実習記録まとめ<br>１４　実習レポート説明・資料作成<br>１５　実習レポート作成 | |
| ［使用テキスト・参考文献］ | ・「最新　介護福祉士養成講座１０　第２版<br>介護総合演習」(中央法規出版)<br>・プリント配布 |
| ［単位認定の方法及び基準］ | ・教科出席率が 80%以上の者に対して、以下の配点による総合点を算出し、学内共通の基準による絶対評価を行う。<br>・考査点(100%) |

# 授　業　概　要

（介護福祉科）

| | | |
|---|---|---|
| 授業科目名<br>介護実習Ⅰ-1，2，3 | | 授業の種類（　講義　・　演習　・　実習　） |
| 授業担当者<br>伊東　美子 | 実務経験 | 特別養護老人ホームにて介護福祉士として介護業務に従事する。 |
| 授業担当者<br>棚橋　恭子 | 実務経験 | 病院、高齢者施設、障害者支援施設に看護師として従事する。 |
| 授業担当者<br>高橋　良子 | 実務経験 | 介護老人保健施設や訪問介護員として介護福祉士業務に従事する。 |
| 授業担当者<br>山岸　涼子 | 実務経験 | 特別養護老人ホーム、訪問入浴、訪問介護員として介護福祉士業務に従事する。 |
| 授業担当者<br>小林　恵太 | 実務経験 | 有料老人ホーム・老人保健施設にて介護業務に従事する |

| | | | |
|---|---|---|---|
| 授業の回数<br>１日８時間×25 日 | 時間数（単位数）<br>200 時間（4 単位） | 配当学年・時期<br>１年・後期 | （　必修・　選択　） |

［授業の目的・ねらい］

さまざまな生活の場における利用者個々の生活リズムや個性を理解したうえで、ケアの個別性について理解し、利用者・家族とのコミュニケーションを実践し、生活支援技術の確認を行い、他の専門職等との協働や関係機関との連携を通じたチームの一員としての介護福祉士としての役割について理解する。

［授業全体の内容の概要］

介護実習では、個々の生活リズムや個性を理解するという観点から様々な生活の場において個別ケアを理解し、利用者・家族とのコミュニケーションの実践、介護技術の確認、多職種協働や関係機関との連携を通じてチームの一員としての介護福祉士の役割を理解する。

個別ケアを行うために、個々の生活リズムや個性を理解し、利用者のニーズに沿って利用者ごとの介護計画の作成、実施、実施後の評価、計画の修正といった一連の介護過程を展開し、他科目で学習した知識や技術を統合して、具体的な介護サービスの提供の基本となる実践力を身につける。

［授業終了時の達成課題（到達目標）］

② 様々な生活の場においての個別ケアを理解することができる。

②両者・家族とのコミュニケーションの実践、介護技術の確認、多職種協働や関係機関との連携を通じてチームの一員としての介護福祉士の役割について理解することができる

［授業の日程と各回のテーマ・内容・授業方法］コマ数　（15 回までの場合はセル結合）

実習Ⅰ－１（５日間）・・・・・１年生後期

目　的：通所介護の特性を学び、利用者から親しまれる態度、コミュニケーション方法を学ぶ。

目　標：①施設の役割・機能が居宅で暮らす利用者に対して、どのような役割を果たしているの

か理解する。

②障害特性に応じたコミュニケーションを使用し、利用者を理解する。

③利用者が、居宅で暮らすことの意義、地域生活をどのように継続しているのかを学ぶ。

達成方法・通所介護実習は、1 日の実習を 8 時間とし、5 日間を基本とする。

・マンツーマン指導を基本とする。

・利用者と職員がどのように信頼関係を築いているか観察し理解する。

・レクリエーション活動の企画を行い、実施する。

・利用者、家族に対する接し方や援助方法について指導を受ける。

・利用者とその家族、関係機関などの地域社会との連携方法を理解する。

実習Ｉ－２（5 日間）・・・・・1 年生後期

目　的：利用者の福祉施設での日常生活について理解することで、一人ひとりのライフスタイルの多様性を学ぶ。

目　標：①利用者とのコミュニケーションを通じて、個別性を理解するとともに、介護職としての一般的な役割について理解する。

②利用者への日常生活援助を提供し、利用者が求めている援助方法を理解し、どのように対応すべきか考察することで、判断力を養う。

③利用者を敬愛し、尊重する姿勢を身につけることで、マナー、職務規定を遵守する。

達成方法・地域密着実習は、1 日の実習を 8 時間とし、5 日間を基本とする。

・マンツーマン指導を基本とする。

・コミュニケーション技術を用いて利用者と積極的に関わる。

・利用者との関りを通じて、適切な対応方法について学び、実践する。

・実習指導者からの指導のもと、基本的な介護技術を学び、実践する。

・日常生活を含めた、個別性について理解する。

実習Ｉ－３（１５日間）・・・・・１年生後期

目　的：様々な利用者に出会い、思いや願いにふれることで利用者を理解する。また、利用者の日常生活の理解を通して、自立支援を観点とした基礎的な援助方法について学ぶ。

目　標：①「その人らしさ」が発揮できる日常生活を支援し、継続できるよう個別ケアの重要性を理解する。

②利用者とのコミュニケーションを通した人間関係の形成を行い、状況に応じた適切な生活支援技術とは何かについて理解する。

③障害レベルに応じて求められる介護方法、それを援助する福祉用具の知識や活用能力を身につけ、習得する。

達成方法・入所施設実習は、1 日の実習を 8 時間とし、15 日間を基本とする。

・マンツーマン指導を基本とし習熟度をはかる。

・実習先の勤務時間に合わせて、早番・遅番を実施する。（基本は日勤）

・コミュニケーション技術を用いて利用者と積極的に関わる。

・利用者との関りを通じて、適切な対応方法について学び、実践する。

・実習指導者からの指導のもと、基本的な介護技術を学び、実践する。

・日常生活を含めた、個別性について理解する。

| | |
|---|---|
| ［使用テキスト・参考文献］ | ・最新　介護福祉士養成講座１０　第２版<br>「介護総合演習・介護実習」　中央法規出版<br>・介護実習指導要綱（当校作成） |
| ［単位認定の方法及び基準］ | ・各実習日程の 80％の出席<br>・実習指導者による評価<br>・担当教員による評価<br>上記を総合的に評価する |

# 授　業　概　要

（介護福祉科）

| | | | |
|---|---|---|---|
| 授業科目名<br>障害の理解Ⅰ | | 授業の種類（　講義　・　演習　・　実習　） | |
| 授業担当者<br>伊東　美子 | 実務経験 | 特別養護老人ホームにて、介護福祉士として介護業務に従事する。 | |
| 授業の回数<br>１５回 | 時間数（単位数）<br>３０時間（２単位） | 配当学年・時期<br>１年・前期 | （　必修・　選択　） |

［授業の目的・ねらい］

障害のある人の心理や身体機能に関する基礎的知識を習得するとともに、障害のある人の地域での生活を理解し、本人のみならず家族や地域を含めた周囲の環境への支援を理解するための基礎的な知識を習得する。

［授業全体の内容の概要］

障害の理解では、障害の基礎的理解として、障害の概念や基本的理念、さらに障害の医学的・心理的側面の基礎的な知識を学び、障害のある人のライフステージや特性に応じた支援、多職種連携と協働、家族への支援について学ぶ。

［授業終了時の達成課題（到達目標）］

・障害のある人の生活を支援するという観点から、障害の概念や、障害の特性に応じた制度の基礎的な知識を理解できる。

・医学的、心理的側面から、障害による心身への影響や心理的な変化を理解できるようにする。

［授業の日程と各回のテーマ・内容・授業方法］コマ数　（15 回までの場合はセル結合）

１　障害の概念（障害のとらえ方、ICIDH から ICF へ、障害の定義）
２　障害者福祉の基本理念（ノーマライゼーション・リハビリテーション
　　インクルージョン・エンパワメント・ストレングス他）
３　障害者福祉に関連する制度（障害者総合支援法・障害者差別解消法・障害者
　　虐待防止法）
４　ユニバーサルデザインについて（演習）①
５　ユニバーサルデザインについて（演習）②
６　障害のある人の心理①
７　障害のある人の心理②
　　障害のある人の生活と障害の特性に応じた支援
８　肢体不自由（運動機能障害）①
９　肢体不自由（運動機能障害）②
１０　視覚障害
１１　聴覚・言語障害
１２　重複障害①
１３　重複障害②
１４　内部障害①
１５　内部障害②

| | |
|---|---|
| ［使用テキスト・参考文献］ | ・「最新　介護福祉士養成講座１４　第２版　障害の理解」（中央法規出版） |
| ［単位認定の方法及び基準］ | ・教科出席率が 80%以上の者に対して、以下の配点による総合点を算出し、学内共通の基準による絶対評価を行う。<br>１．考査点(100%) |

# 授　業　概　要

（介護福祉科）

| | | | |
|---|---|---|---|
| 授業科目名<br>障害の理解Ⅱ | | 授業の種類（ 講義 ・ 演習 ・ 実習 ） | |
| 授業担当者<br>伊東　美子 | 実務経験 | 特別養護老人ホームにて、介護福祉士として介護業務に従事する。 | |
| 授業の回数<br>１５回 | 時間数（単位数）<br>３０時間（２単位） | 配当学年・時期<br>１年・後期 | （ 必修・ 選択 ） |

［授業の目的・ねらい］

障害のある人の心理や身体機能に関する基礎的知識を習得するとともに、障害のある人の地域での生活を理解し、本人のみならず家族や地域を含めた周囲の環境への支援を理解するための基礎的な知識を習得する。

［授業全体の内容の概要］

障害の理解では、障害の基礎的理解として、障害の概念や基本的理念、さらに障害の医学的・心理的側面の基礎的な知識を学び、障害のある人のライフステージや特性に応じた支援、多職種連携と協働、家族への支援について学ぶ。

［授業終了時の達成課題（到達目標）］

・障害のある人のライフステージや障害の特性を踏まえ、機能の変化が生活に及ぼす影響を理解し、ＱＯＬを高める支援につなぐことができるようにする。
・障害のある人の生活を地域で支えるためのサポート体制や、多職種連携・協働による支援について理解できるようにする。
・障害のある人を支える家族の理解について理解し、家族の受容段階や介護力の応じた支援につなぐことができるようにする。

［授業の日程と各回のテーマ・内容・授業方法］コマ数　（15 回までの場合はセル結合）

障害の特性に応じた支援

１　重症心身障害①
２　重症心身障害②
３　知的障害
４　精神障害
５　高次脳機能障害①
６　高次脳機能障害②
７　発達障害①
８　発達障害②
９　難病①
１０　難病②
１１　地域のサポート体制
１２　チームアプローチ・連携と協働
１３　家族への支援
１４　家族の介護力の評価と介護負担の軽減

| １５　まとめ | |
|---|---|
| ［使用テキスト・参考文献］ | ・「最新　介護福祉士養成講座１４　第２版　障害の理解」（中央法規出版） |
| ［単位認定の方法及び基準］ | ・教科出席率が 80%以上の者に対して、以下の配点による総合点を算出し、学内共通の基準による絶対評価を行う。<br>１．考査点(100%) |

# 授　業　概　要

（介護福祉科）

| | | | |
|---|---|---|---|
| 授業科目名<br>認知症の理解Ⅰ | | 授業の種類（ 講義 ・ 演習 ・ 実習 ） | |
| 授業担当者<br>山岸　涼子 | 実務経験 | 特別養護老人ホーム、訪問入浴、訪問介護員として介護福祉士業務に従事する。 | |
| 授業の回数<br>15 回 | 時間数（単位数）<br>30 時間（２単位） | 配当学年・時期<br>1 年・前期 | （ 必修・ 選択 ） |

［授業の目的・ねらい］

認知症の人の心理や身体機能、社会的側面に関する基礎的な知識を習得するとともに、認知症の人を中心に捉え、本人や家族、地域の力を活かした認知症ケアについて理解するための基礎的な知識を習得する学習とする。

［授業全体の内容の概要］

認知症を取り巻く状況、認知症ケアの歴史や理念について学ぶ。また、認知症の原因となる主な疾患や症状の特徴を学び、それらによって引き起こされる機能の変化や日常生活への影響について理解し、認知症ケアの知識を理論的に学ぶ。

［授業終了時の達成課題（到達目標）］

認知症ケアの理念、方法と支援について理解できる。具体的には「認知症とは何か、認知症の特徴」「認知症による生活障害」「認知症のケア」「認知症の方の支援」について述べることができる。

［授業の日程と各回のテーマ・内容・授業方法］コマ数　（15 回までの場合はセル結合）

1　認知症とは何か
2　脳のしくみ
3　認知症の人の心理
4　中核症状の理解
5　生活障害の理解
6　BPSD の理解
7　認知症の診断と重症度
8　認知症の原因疾患と症状・生活障害①（アルツハイマー型認知症・血管性認知症レビー小体型認知症）
9　認知症の原因疾患と症状・生活障害②（前頭側頭型認知症・治療可能な認知症）
１０　認知症の治療薬
１１　認知症の予防
１２　認知症を取り巻く状況
１３　認知症ケアの理念と視点
１４　認知症当事者かの視点からみえるもの
１５　まとめ

| | |
|---|---|
| ［使用テキスト・参考文献］ | ・「最新　介護福祉士養成講座１３　第２版<br>認知症の理解」(中央法規出版)<br>・プリント配布 |
| ［単位認定の方法及び基準］ | ・教科出席率が 80%以上の者に対して、以下の配点による総合点を算出し、学内共通の基準による絶対評価を行う。<br>・考査点(100%) |

# 授　業　概　要

（介護福祉科）

| | | | |
|---|---|---|---|
| 授業科目名<br>認知症の理解Ⅱ | | 授業の種類（ 講義 ・ 演習 ・ 実習 ） | |
| 授業担当者<br>山岸　涼子 | 実務経験 | 特別養護老人ホーム、訪問入浴、訪問介護員として介護福祉士業務に従事する。 | |
| 授業の回数<br>15 回 | 時間数（単位数）<br>30 時間（２単位） | 配当学年・時期<br>１年・後期 | （ 必修・ 選択 ） |

［授業の目的・ねらい］

認知症の人の心理や身体機能、社会的側面に関する基礎的な知識を習得するとともに、認知症の人を中心に捉え、本人や家族、地域の力を活かした認知症ケアについて理解するための基礎的な知識を習得する学習とする。

［授業全体の内容の概要］

利用者個々の特性を捉えた適切なケアを提供するための知識や支援方法、地域で生活する認知症の人とその家族の支援体制のあり方、他職種連携・協働のあり方について理解し、基礎となる知識を理論的に学ぶ。

［授業終了時の達成課題（到達目標）］

認知症の人の生活及び家族や社会とのかかわりからその人を中心としたケアの実践につなげることができるようになる。また認知症の人を支える家族の課題について理解し、支援につなげることができるようになる。具体的には「認知症の人とのコミュニケーション」「認知症の人へのさまざまなケア手法」「環境づくり」「家族支援」「地域生活支援」について述べることができる。

［授業の日程と各回のテーマ・内容・授業方法］コマ数　（15 回までの場合はセル結合）

１　パーソンセンタードケアとは何か
２　認知症の人の理解と認知症の人の特性を踏まえたアセスメントツール
３　認知症の人とのコミュニケーション
４　認知症の人へのケア①
５　認知症の人へのケア②
６　認知症の人へのさまざまなアプローチ①
７　認知症の人へのさまざまなアプローチ②
８　認知症の人の終末期医療と介護
９　環境づくり
１０　家族への支援①
１１　家族への支援②
１２　介護福祉職への支援
１３　地域包括ケアシステムにおける認知症ケア
１４　多職種連携と協働
１５　まとめ

| | |
|---|---|
| ［使用テキスト・参考文献］ | ・「最新　介護福祉士養成講座１３　第２版<br>認知症の理解」(中央法規出版)<br>・プリント配布 |
| ［単位認定の方法及び基準］ | ・教科出席率が 80%以上の者に対して、以下の配点による総合点を算出し、学内共通の基準による絶対評価を行う。<br>・考査点(100%) |

# 授　業　概　要

（介護福祉科）

| | | | |
|---|---|---|---|
| 授業科目名<br>こころとからだのしくみⅠ | | 授業の種類（ 講義 ・ 演習 ・ 実習 ） | |
| 授業担当者<br>棚橋　恭子 | 実務経験 | 病院、介護老人保健施設、准看護師とし従事し訪問看護ステーション、障害者支援施設、特別養護老人ホームに看護師として従事した。 | |
| 授業の回数<br>３０回 | 時間数（単位数）<br>６０時間（４単位） | 配当学年・時期<br>１年・前期 | （ 必修・ 選択 ） |

［授業の目的・ねらい］

障害や加齢によって生じた生活への支障に適切に対応するために心身の構造や、機能、発達段階について基本的な知識を身につける。

高齢者のこころとからだの変化は、一つひとつの生活行動とむすびついている。その基盤となっている生活支援を行う際に必要となる基礎的知識を身につけこころとからだのしくみ及び機能低下や障害が生活に及ぼす影響について学習する。

［授業全体の内容の概要］

こころとからだのしくみⅠでは「解剖学」「生理学」「運動学」「心理学」をもとに人が生活するうえで身体がどのようにはたらくか、介護実践に必要な根拠となる、心身の構造や機能についての知識を習得する。身体的、心理的、社会的側面を統合的に捉えるための知識を身につける。介護実践に必要な観察力、判断力の基盤となる知識を学習し、そのうえで予防の視点を身につける。移動、身じたく、食事、入浴、では生活場面ごとに、こころとからだ、心身の機能低下や障害が生活に及ぼす影響、変化に対する観察ポイント、医療職との連携ポイント等について理解できる能力を養う。　人生の最終段階にある終末期の心身の変化、生活に及ぼす影響についても生活に必要となる基礎的な知識を養う。

［授業終了時の達成課題（到達目標）］

１・身体の構成と生きるしくみについて学び説明できる。

２・高齢者や身体上または精神上の障害のある人がより良い日常生活を営めるように生活支援に必要な知識と技術を学び実践できる。

［授業の日程と各回のテーマ・内容・授業方法］コマ数　（15 回までの場合はセル結合）

| | |
|---|---|
| １．こころのしくみ①人間の欲求と自己実現 | 16．移動に関するしくみ①　ＡＤＬとＩＡＤＬ |
| ２．こころのしくみ②学習・記憶・思考・適応機制 | 17．移動に関するしくみ②　基本的姿勢と歩行のしくみ |
| ３．からだの理解①　全身の筋肉 | 18．移動に関するしくみ③　廃用症候群 |
| | 19．移動に関するしくみ④　転倒 |

| | |
|---|---|
| ４．からだの理解②　全身の骨格<br><br>５．からだの理解③　感覚器(眼球)<br><br>６．からだの理解③　感覚器（耳、その他）<br><br>7.　からだの理解④　呼吸器のしくみ<br><br>8.　からだの理解⑤　消化器のしくみ<br><br>9.　からだの理解⑥　泌尿器のしくみ<br><br>10．からだの理解⑦　生殖器と内分泌<br><br>11．からだの理解⑧　循環器のしくみ<br><br>12．からだの理解⑨　血液<br><br>13．からだの理解⑩　代謝のしくみ<br><br>14．からだの理解⑪　バイタルサイン<br><br>15．からだの理解⑫　脳・神経・ホメオスタシス | 20．移動に関するしくみ⑤　褥瘡<br><br>21．身じたくに関連したしくみ①　身じたくの行為の生理的意味<br><br>22．身じたくに関連したしくみ②　顔の構造・耳・鼻の構造と機能<br><br>23．身じたくに関連したしくみ③　爪・毛髪の構造と機能<br><br>24．身じたくに関連したしくみ④　眼の構造と機能<br><br>25．身じたくに関連したしくみ⑤　口腔の構造と機能<br><br>26．身じたくに関連したしくみ⑥　口腔の構造と機能<br><br>27．入浴・清潔保持に関連したしくみ①<br>入浴・清潔に関連した基本知識<br><br>28．入浴・清潔保持に関連したしくみ②<br>清潔保持に関連したこころと身体のしくみ<br><br>29．入浴・清潔保持に関連したしくみ③<br>機能低下による入浴・清潔保持に及ぼす影響<br>30．入浴・清潔保持に関連したしくみ④<br>変化の気づきと医療職との連携 |

| | |
|---|---|
| ［使用テキスト・参考文献］ | 最新・介護福祉士養成講座（中央法規出版）<br>・１１　「こころとからだのしくみ」　第２版<br>・プリント配布 |
| ［単位認定の方法及び基準］ | ・教科出席率が 80%以上で、筆記試験 60 点以上 |

# 授　業　概　要

（介護福祉科）

| | | | |
|---|---|---|---|
| 授業科目名<br>こころとからだのしくみⅡ | | 授業の種類（ 講義 ・ 演習 ・ 実習 ） | |
| 授業担当者<br>棚橋　恭子 | 実務経験 | 病院、介護老人保健施設、准看護師とし従事し訪問看護ステーション、障害者支援施設、特別養護老人ホームに看護師として従事した。 | |
| 授業の回数<br>３０回 | 時間数（単位数）<br>６０時間（４単位） | 配当学年・時期<br>１年・後期 | （ 必修 ・ 選択 ） |

［授業の目的・ねらい］

障害や加齢によって生じた生活への支障に適切に対応するために心身の構造や、機能、発達段階について基本的な知識を身につける。

高齢者のこころとからだの変化は、一つひとつの生活行動とむすびついている。その基盤となっている生活支援を行う際に必要となる基礎的知識を身につけこころとからだのしくみ及び機能低下や障害が生活に及ぼす影響について学習する。

［授業全体の内容の概要］

こころとからだのしくみⅠでは「解剖学」「生理学」「運動学」「心理学」をもとに人が生活するうえで身体がどのようにはたらくか、介護実践に必要な根拠となる、心身の構造や機能についての知識を習得した。こころとからだのしくみⅡでは、食事、入浴、では生活場面ごとに、こころとからだ、心身の機能低下や障害が生活に及ぼす影響、変化に対する観察ポイント、医療職との連携ポイント、人生の最終段階にある終末期の心身の変化、生活に及ぼす影響についても生活に必要となる基礎的な知識を養う。

［授業終了時の達成課題（到達目標）］

１・身体の構成と生きるしくみについて学び説明できる。

２・高齢者や身体上または精神上の障害のある人がより良い日常生活を営めるように生活支援に必要な知識と技術を学び実践できる。

［授業の日程と各回のテーマ・内容・授業方法］コマ数　（15 回までの場合はセル結合）

| | |
|---|---|
| １．食事に関連したしくみ①<br>からだをつくる栄養素と働き<br>２．食事に関連したしくみ②<br>食べることの生理的意味<br>３．食事に関連したしくみ③<br>食事に関連したからだのしくみ<br>４．食事に関連したしくみ④<br>摂取・嚥下に関わる解剖のしくみ<br>５．食事に関連したしくみ⑤ | １６．排泄に関連したしくみ⑤<br>ストーマ・膀胱留置カテーテル<br>１７．排泄に関連したしくみ⑥<br>排泄障害の種類と特徴<br>１８．排泄に関連したしくみ⑦<br>排泄障害に応じた対処方法<br>１９．排泄に関連したしくみ⑧<br>医療職との連携<br>２０．排泄に関連したしくみ⑨ |

| | |
|---|---|
| 消化と吸収のメカニズム<br><br>６．食事に関連したしくみ⑥<br>食事の種類<br>７．食事に関連したしくみ⑦<br>食べることに関する機能低下、障害の原因<br>８．食事に関連したしくみ⑧<br>機能低下、障害が及ぼす食事への影響<br>９．食事に関連したしくみ⑨<br>代償的な栄養摂取方法<br>１０．食事に関連したしくみ⑨<br>誤嚥と窒息<br>１１．食事に関連したしくみ⑩<br>脱水の原因と予防策<br>１２．排泄に関連したしくみ①<br>排泄の生理的意味<br>１３．排泄に関連したしくみ②<br>便の生成と排便のしくみ<br>１４．排泄に関連したしくみ③<br>尿の生成と排尿のしくみ<br>１５．排泄に関連したしくみ④<br>便秘・下剤と改善策 | 演習<br><br>２１．睡眠に関連したしくみ①<br>睡眠の基礎知識<br>２２．睡眠に関連したしくみ②<br>睡眠のための環境条件と生活習慣<br>２３．睡眠に関連したしくみ③<br>睡眠障害の種類と特徴<br>２４．睡眠に関連したしくみ④<br>睡眠障害の対応<br>２５．死にゆく人のこころとからだのしくみ<br>①　死のとらえ方<br>２６．死にゆく人のこころとからだのしくみ<br>②　死に対するこころの理解<br>２７．死にゆく人のこころとからだのしくみ<br>③　終末期から死までの身体機能の特徴<br>２８．死にゆく人のこころとからだのしくみ<br>④　死後のからだの変化<br>２９．死にゆく人のこころとからだのしくみ<br>⑤　死の受容過程<br>３０．死にゆく人のこころとからだのしくみ<br>⑥　医療職との連携 |
| ［使用テキスト・参考文献］ | 最新・介護福祉士養成講座（中央法規出版）<br>・１１　「こころとからだのしくみ」　第２版<br>・プリント配布 |
| ［単位認定の方法及び基準］ | ・教科出席率が 80%以上で、筆記試験 60 点以上 |

# 授　業　概　要

（介護福祉科）

| | | | |
|---|---|---|---|
| 授業科目名<br>医療的ケアⅠ | | 授業の種類（ 講義 ・ 演習 ・ 実習 ） | |
| 授業担当者<br>棚橋　恭子 | 実務経験 | 病院、介護老人保健施設、准看護師とし従事し<br>訪問看護ステーション、障害者支援施設、特別養護老人ホームに看護師として従事した。 | |
| 授業の回数<br>１０回 | 時間数（単位数）<br>２０時間（１単位） | 配当学年・時期<br>１年・後期 | （ 必修・ 選択 ） |

［授業の目的・ねらい］

「個人の尊厳と自立」「医の倫理」について医療的ケアを行う立場のたつ専門職としての心構えを形成する。人の生命に直接関係する行為であることの意義と自覚について説明できる。

［授業全体の内容の概要］

授業導入時、前回の復習を行う。（口頭質問等）

医療職との連携の下で医療的ケアを安全・適切に実施できるよう、必要な知識・技術を習得することを学習のねらいとしている。医療的ケアを初めて学ぶ学生が「なぜ医療的ケアを学ぶのか」についてしっかり理解するために解剖生理学的な基礎知識から実施の際の留意点、緊急時対応など実践的な知識・技術を学び、その上で医療的ケアを安全かつ適切に実施できるよう基礎的知識を身につける。

［授業終了時の達成課題（到達目標）］

１「喀痰吸引」「経管栄養」を安全に実施するための基礎知識を習得し説明できる。

２　個人の尊厳と自立について理解し、利用者の尊厳を守り、自立を助ける医療的ケアの実践ができる。

３　利用者の自己決定の権利・個人情報の保護、利用者や家族に対する説明と同意の意味を説明できる。

［授業の日程と各回のテーマ・内容・授業方法］コマ数　（15 回までの場合はセル結合）

１．医療的ケア実施の基礎

２．医療の倫理・個人の尊厳と自立

３．保健医療・医行為に関する制度

４．喀痰吸引や経管栄養の安全な実施

５．清潔の保持と感染予防①

| | |
|---|---|
| ６．健康状態の把握<br><br>７．救急蘇生（知識の習得）<br><br>８．救急蘇生（技術の習得）<br><br>９．呼吸器系の解剖と働き<br><br>10．いつもと違う呼吸 | |
| ［使用テキスト・参考文献］ | 最新　介護福祉士養成講座１５「医療的ケア」第２版<br>プリント |
| ［単位認定の方法及び基準］ | ・教科出席率が 80％以上で、筆記試験 60 点以上 |

# 授　業　概　要

（介護福祉科）

| | | | |
|---|---|---|---|
| 授業科目名<br>人間関係とコミュニケーションⅡ | | 授業の種類（ 講義 ・ 演習 ・ 実習 ） | |
| 授業担当者<br>栄　千恵子 | 実務経験 | 神経内科クリニック、教育研究所等で心理カウンセラーとして勤務。 | |
| 授業の回数<br>15 回 | 時間数（単位数）<br>30 時間（２単位） | 配当学年・時期<br>２年・前期 | （ 必修 ・ 選択 ） |

［授業の目的・ねらい］

介護の質を高めるために必要な、チームマネジメントの基礎的な知識を理解し、チームで働くための能力を養う学習とする。

［授業全体の内容の概要］

チームマネジメントでは、ヒューマンサービスとしての介護サービスの特徴を踏まえ、チーム運営の基本や人材育成の管理法の基礎を学ぶ。

［授業終了時の達成課題（到達目標）］

・介護実践をマネジメントするために必要な組織の運営管理、人材の育成や活用等の人材管理、それらに必要なリーダーシップ・フォロワーシップ等、チーム運営の基本を理解できるようにする。

［授業の日程と各回のテーマ・内容・授業方法］コマ数

１　組織の条件とコミュニケーションの特徴
２　組織において求められるコミュニケーション
３　ヒューマンサービスとしてのコミュニケーション
４　介護現場で求められるチームマネジメント
５　介護実践におけるチームマネジメントへの取り組み
６　ケアを展開するために必要なチームとその取り組み
７　チームでケアを展開するためのマネジメント
８　介護福祉職のキャリアと求められる実践力
９　介護福祉職としてのキャリアデザイン
１０　自己研鑽に必要な姿勢
１１　介護サービスを支える組織の構造
１２　介護サービスを支える組織の機能と役割
１３　介護サービスを支える組織の管理
１４　まとめ
１５　まとめ

| | |
|---|---|
| ［使用テキスト・参考文献］ | ・「最新　介護福祉士養成講座１　人間の理解　　第２版」<br>（中央法規出版） |

| | |
|---|---|
| ［単位認定の方法及び基準］ | ・教科出席率が 80%以上で、筆記試験 60 点以上 |

# 授　業　概　要

（介護福祉科）

| | | | |
|---|---|---|---|
| 授業科目名<br>社会と制度の理解Ⅱ－１ | | 授業の種類（ 講義 ・ 演習 ・ 実習 ） | |
| 授業担当者<br>安藤　清彦 | 実務経験 | 障害者支援施設等で、社会福祉士として相談支援等の業務に従事する。 | |
| 授業の回数<br>15 回 | 時間数（単位数）<br>30 時間（２単位） | 配当学年・時期<br>２年・前期 | （ 必修・ 選択 ） |

［授業の目的・ねらい］

１　「障害者の制度」では、制度の歴史と変遷、しくみについて理解する。

２　「介護実践に関連する諸制度」では、介護福祉士として様々な制度を理解する。

上記１．２を目的とし、介護福祉士として利用者に必要な制度やサービスを他の専門職や機関と連携することができるようになることをねらいとする。

［授業全体の内容の概要］

社会の理解では、生活の基本機能とライフルサイクルの変化及び家族、社会、組織、地域社会の概念を理解する。その上で、地域社会における生活支援について学び、地域共生社会の実現に向けた制度や施策、社会保障制度、社会福祉と介護保険制度、障害者福祉と障害者保健福祉制度や他の介護実践に関連する諸制度にどのようなものがあるかを具体的に学ぶ。

［授業終了時の達成課題（到達目標）］

１　障害者総合支援法について、制度の解説にとどまらず、その背景や理念が説明できる。

２　介護を実践していくうえで必要な様々な諸制度がわかる。

３　1．２年で学習した「社会と制度の理解Ⅰ・Ⅱ」について、その学習を振り返ることで知識修得確認を行うことができる。

［授業の日程と各回のテーマ・内容・授業方法］コマ数

１．高齢者保健福祉の動向・歴史

２．高齢者保健福祉の関する法体系

３．介護保険制度①

４．介護保険制度②

５．介護保険制度③

６．障害者保健福祉の動向

７．障害者の定義

８．障害者総合支援法制度①

９．障害者総合支援法制度②

１０．障害者総合支援法制度③

１１．個人の権利を守る制度

１２．保健医療に関する制度

１３．貧困と生活困窮に関する制度

１４．地域生活を支援する制度

１５　まとめ

| | |
|---|---|
| ［使用テキスト・参考文献］ | ・「最新　介護福祉士養成講座２　社会の理解　　第２版」（中央法規出版）<br>・プリント配布 |
| ［単位認定の方法及び基準］ | ・教科出席率が 80%以上の者に対して、以下の配点による総合点を算出し、学内共通の基準による絶対評価を行う。<br>１．考査点（100%） |

# 授　業　概　要

（介護福祉科）

| | | | |
|---|---|---|---|
| 授業科目名<br>社会と制度の理解Ⅱ－２ | | 授業の種類（ 講義 ・ 演習 ・ 実習 ） | |
| 授業担当者<br>安藤　清彦 | 実務経験 | 障害者支援施設等で、社会福祉士として相談支援等の業務に従事する。 | |
| 授業の回数<br>15 回 | 時間数（単位数）<br>30 時間（２単位） | 配当学年・時期<br>２年・後期 | （ 必修・ 選択 ） |

［授業の目的・ねらい］

国家試験のひとつの科目である社会の理解ついて、国家試験における出題範囲の把握とこれまでの知識修得の確認を行う。また、過去問題や予想問題を解くことで、出題傾向の理解と国家試験に合格できるための力をつける。

［授業全体の内容の概要］

社会の理解Ⅱ-1 では、生活の基本機能とライフルサイクルの変化及び家族、社会、組織、地域社会の概念を習得しその上で、地域社会における生活支援について学び、地域共生社会の実現に向けた制度や施策、社会保障制度、社会福祉と介護保険制度、障害者福祉と障害者保健福祉制度や他の介護実践に関連する諸制度にどのようなものがあるかを具体的に学んだ。

国家試験のひとつの科目である社会の理解ついて、国家試験における出題範囲の把握とこれまでの知識修得の確認を行う。また、過去問題や予想問題を解くことで、出題傾向の理解と国家試験に合格できるための力をつける。

［授業終了時の達成課題（到達目標）］

１　国家試験における社会の理解の問題を読み込む力をつけることができる。

２　国家試験における社会の理解の問題を解き正答を導き出すことができる。

［授業の日程と各回のテーマ・内容・授業方法］コマ数

１　　国家試験社会の理解　範囲確認、出題傾向の確認

２　　生活と福祉①（国試対策）

３　　生活と福祉②（国試対策）

４　　社会保障制度①（国試対策）

５　　社会保障制度②（国試対策）

６　　障害者福祉①（国試対策）

７　　障害者福祉②（国試対策）

８　　介護保険制度①（国試対策）

９　　介護保険制度②（国試対策）

１０　その他諸制度①　日常生活自立支援事業（国試対策）

１１　その他諸制度②　成年後見制度（国試対策）

１２　その他諸制度③　生活保護（国試対策）

１３　社会の理解　過去問題①（国試対策）

１４　社会の理解　過去問題②（国試対策）

１５　社会の理解　過去問題③（国試対策）

| | |
|---|---|
| ［使用テキスト・参考文献］ | ・「最新　介護福祉士養成講座②　社会の理解　第２版」（中央法規出版）<br>・介護福祉士国試ナビ（中央法規出版）<br>・プリント配布 |
| ［単位認定の方法及び基準］ | ・教科出席率が 80%以上の者に対して、以下の配点による総合点を算出し、学内共通の基準による絶対評価を行う。<br>１．考査点（100%） |

# 授　業　概　要

（介護福祉科）

| | | | |
|---|---|---|---|
| 授業科目名<br>介護の基本Ⅱ-1 | | 授業の種類（ 講義 ・ 演習 ・ 実習 ） | |
| 授業担当者<br>小林　恵太 | 実務経験 | 有料老人ホーム・老人保健施設にて介護業務に従事する | |
| 授業の回数<br>15 回 | 時間数（単位数）<br>30 時間（２単位） | 配当学年・時期<br>２年・前期 | （ 必修・ 選択 ） |

［授業の目的・ねらい］

介護福祉の基本となる理念や、地域を基盤とした生活の継続性を支援するためのしくみを理解し、介護福祉の専門職としての能力を養う学習とする。

［授業全体の内容の概要］

介護を必要とする人の生活の個別性に対応するために、生活の多様性や社会とのかかわりを理解できるようにする。

介護を必要とする人の生活を支援するという観点から介護サービスや地域連携など、フォーマル、インフォーマルな支援を理解できるようにする。

［授業終了時の達成課題（到達目標）］

生活の個別性と多様性、高齢者の生活実態、障害者の生活実態、家族介護者の理解と支援、介護を必要とする人の生活を支えるしくみ、介護を必要とする人の生活の場とフォーマルな支援の活用、インフォーマルな支援の活用、地域連携を理解できる。

［授業の日程と各回のテーマ・内容・授業方法］コマ数　（15 回までの場合はセル結合）

１．生活とは何か　生活の要素
２．生活の特性　「生活のしづらさ」に対する支援
３．介護福祉を必要とする人の「暮らし」を理解するということ
４．介護を必要とする「高齢者」の暮らし
５．介護を必要とする「障害者」の暮らし
６．個人の暮らしや歴史を聴く場合の注意点
７．「その人らしさ」とは何か
８．「生活ニーズ」の理解
９．家族介護者への支援
１０．地域共生社会
１１．地域包括ケアシステム
１２．生活を支えるフォーマルサービスとは何か
１３．生活を支えるインフォーマルサービスとは何か
１４．地域連携
１５．まとめ

| | |
|---|---|
| ［使用テキスト・参考文献］ | 最新「介護福祉士養成講座　介護の基本Ⅱ」第２版　（中央法規出版） |
| ［単位認定の方法及び基準］ | ・教科出席率が 80％以上で、筆記試験 60 点以上 |

# 授　業　概　要

（介護福祉科）

| | | | |
|---|---|---|---|
| 授業科目名<br>介護の基本Ⅱ-2 | | 授業の種類（ 講義 ・ 演習 ・ 実習 ） | |
| 授業担当者<br>小林　恵太 | | 有料老人ホーム・老人保健施設にて介護業務に従事する | |
| 授業の回数<br>30 回 | 時間数（単位数）<br>60 時間（4 単位） | 配当学年・時期<br>2 年・後期 | （ 必修・ 選択 ） |

［授業の目的・ねらい］

介護福祉の基本となる理念や、地域を基盤とした生活の継続性を支援するためのしくみを理解し、介護福祉の専門職としての能力を養う学習とする。

［授業全体の内容の概要］

多職種協働による介護の実践するために、保健・医療・福祉に関する他の職種の専門性、役割を理解する。

介護におけるリスクマネジメントの必要性を理解するとともに、安全の確保のための基礎的な知識や事故への対応を理解する。

介護従事者自身が心身ともに健康に、介護を実践するための健康管理や労働環境の管理について理解できる。

［授業終了時の達成課題（到達目標）］

多職種協働の役割と専門性の理解、多職種連携の意義と課題、介護における安全の確保、事故防止、安全対策、感染対策、薬剤に関する知識と連携、介護従事者を守る法制度、介護従事者を守る環境の整備、介護従事者の心身の健康管理、を理解できる。

［授業の日程と各回のテーマ・内容・授業方法］コマ数　（15 回までの場合はセル結合）

| | |
|---|---|
| １．セーフティマネジメント | １５．まとめ |
| ２．リスクマネジメント | １６．労働基準法と労働安全衛生法 |
| ３．身体拘束について理解する | １７．介護従事者の主な健康問題と管理方法 |
| ４．苦情解決について | １８．介護従事者の主なストレスと対処方法 |
| ５．ヒヤリハット、事故報告書について | １９．心の健康管理 |
| ６．医療行為でないもの | ２０．中間のまとめ |
| ７．災害時の対応について | ２１．身体の健康管理① |
| ８．中間のまとめ① | ２２．身体の健康管理② |
| ９．感染予防の意義と目的 | ２３．労働安全と環境整備① |
| １０．多職種連携、協働について | ２４．労働安全と環境整備② |
| １１．求められるコミュニケーション能力 | ２５．まとめ |
| １２．チームづくりの意義 | ２６．～３０．期末試験＆国家試験対策 |
| １３．グループワーク　危険予知 | |
| １４．グループワーク　発表 | |

| | |
|---|---|
| ［使用テキスト・参考文献］ | 最新　介護福祉士養成講座４　介護の基本Ⅱ第２版　（中央法規出版） |

| | |
|---|---|
| ［単位認定の方法及び基準］ | ・教科出席率が 80%以上で、筆記試験 60 点以上 |

# 授　業　概　要

（介護福祉科）

| 授業科目名<br>生活支援技術Ⅲ―１ | | | 授業の種類（　講義　・　演習　・　実習　） |
|---|---|---|---|
| 授業担当者<br>元井　信明 | 実務経験 | ケアサポート長岡等で看護師として看護業務に従事する。 | |
| 授業の回数<br>１５回 | 時間数（単位数）<br>３０時間（２単位） | 配当学年・時期<br>２年・前期 | （　必修・　選択　） |

［授業の目的・ねらい］

尊厳の保持や自立支援、生活の豊かさの観点から本人主体の生活が維持できるよう、根拠に基づいた介護実践を行うための知識・技術を習得する。

［授業全体の内容の概要］

ＩＣＦの視点を生活支援に活かすことの意義を理解し、自立に向けた居住環境、移動、身支度、食事、入浴、清潔保持、排泄、家事、休息、睡眠、人生の最終段階における介護、福祉用具の意義と活用について基礎的な知識や技術を学ぶ。

［授業終了時の達成課題（到達目標）］

① 障害についての具体的な支援内容・支援方法が理解できる
② 障害や疾病によっての困りごとに対して介護福祉士としてのかかわり方が理解できる」
③ 障害や疾病のある人のさまざまな暮らしや思いを理解でき、尊厳の保持や自立支援の考え方ができる

［授業の日程と各回のテーマ・内容・授業方法］コマ数

障害に応じた生活支援技術
１　肢体不自由に応じた介護
２　視覚障害に応じた介護
３　聴覚言語障害に応じた介護①
４　聴覚言語障害に応じた介護②
５　重複障害に応じた介護①
６　重複障害に応じた介護②
７　内部障害【心臓機能障害に応じた介護】
８　内部障害【呼吸器機能障害に応じた介護】
９　内部障害【腎臓機能障害に応じた介護】
１０　内部障害【膀胱・直腸機能障害に応じた介護】
１１　内部障害【小腸機能障害に応じた介護】
１２　内部障害【ＨＩＶによる免疫機能障害に応じた介護】
１３　内部障害【肝臓機能障害に応じた介護】
１４　重症心身障害に応じた介護
１５　まとめ

| | |
|---|---|
| ［使用テキスト・参考文献］ | 最新　介護福祉士養成講座８　生活支援技術Ⅲ　　第２版<br>（中央法規出版） |
| ［単位認定の方法及び基準］ | ・教科出席率が 80%以上の者に対して、以下の配点による総合点を算出し、学内共通の基準による絶対評価を行う。<br>１．考査点(100%) |

# 授　業　概　要

（介護福祉科）

| | | | |
|---|---|---|---|
| 授業科目名<br>生活支援技術Ⅲ―２ | | 授業の種類（　講義　・　演習　・　実習　） | |
| 授業担当者<br>池田　貴夫 | 実務経験 | 精神保健福祉士、社会福祉士、介護支援専門員の資格を持ち、医療ソーシャルワーカーとして病院、福祉施設に従事する。 | |
| 授業の回数<br>１５回 | 時間数（単位数）<br>３０時間（２単位） | 配当学年・時期<br>２年・後期 | （　必修・　選択　） |

［授業の目的・ねらい］

尊厳の保持や自立支援、生活の豊かさの観点から本人主体の生活が維持できるよう、根拠に基づいた介護実践を行うための知識・技術を習得する。

［授業全体の内容の概要］

ＩＣＦの視点を生活支援に活かすことの意義を理解し、自立に向けた居住環境、移動、身支度、食事、入浴、清潔保持、排泄、家事、休息、睡眠、人生の最終段階における介護、福祉用具の意義と活用について基礎的な知識や技術を学ぶ。

［授業終了時の達成課題（到達目標）］

① 障害についての具体的な支援内容・支援方法が理解できる
② 障害や疾病によっての困りごとに対して介護福祉士としてのかかわり方が理解できる」
③ 障害や疾病のある人のさまざまな暮らしや思いを理解でき、尊厳の保持や自立支援の考え方ができる

［授業の日程と各回のテーマ・内容・授業方法］コマ数

障害に応じた生活支援技術

１　知的障害に応じた介護
２　精神障害に応じた介護
３　高次脳機能障害に応じた介護
４　発達障害に応じた介護①
５　発達障害に応じた介護②
６　筋萎縮性側索硬化症（ＡＬＳ）に応じた介護①
７　筋萎縮性側索硬化症（ＡＬＳ）に応じた介護②
８　パーキンソン病に応じた介護①
９　パーキンソン病に応じた介護②
１０　悪性関節リウマチに応じた介護①
１１　悪性関節リウマチに応じた介護②
１２　筋ジストロフィーに応じた介護①
１３　筋ジストロフィーに応じた介護②
１４　まとめ①
１５　まとめ②

| | |
|---|---|
| ［使用テキスト・参考文献］ | 最新　介護福祉士養成講座８　生活支援技術Ⅲ　　第２版<br>（中央法規出版） |
| ［単位認定の方法及び基準］ | ・教科出席率が 80％以上で、筆記試験 60 点以上 |

# 授　業　概　要

（介護福祉科）

| | | |
|---|---|---|
| 授業科目名<br>生活支援技術Ⅳ | | 授業の種類（　講義　・　演習　・　実習　） |
| 授業担当者<br>伊東　美子 | 実務経験 | 特別養護老人ホームにて、介護福祉士として介護業務に従事する。 |
| 授業担当者<br>大橋　政雄 | 実務経験 | 専門学校専任教員に従事する。 |
| 授業担当者<br>郷　貴大 | 実務経験 | 理学療法士としてリハビリ業務に従事する。 |

| | | | |
|---|---|---|---|
| 授業の回数<br>３０回 | 時間数（単位数）<br>６０時間（４単位） | 配当学年・時期<br>２年・前期 | （　必修・　選択　） |

［授業の目的・ねらい］

尊厳の保持や自立支援、生活の豊かさの観点から本人主体の生活が維持できるよう、根拠に基づいた介護実践を行うための知識・技術を習得する。

［授業全体の内容の概要］

ＩＣＦの視点を生活支援に活かすことの意義を理解し、自立に向けた居住環境、移動、身支度、食事、入浴、清潔保持、排泄、家事、休息、睡眠、人生の最終段階における介護、福祉用具の意義と活用について基礎的な知識や技術を学ぶ。

［授業終了時の達成課題（到達目標）］

① 介護福祉士に必要な栄養や調理の知識や技術が理解でき、実践できる
② 介護福祉士における生活リハビリテーションについて、理解でき実践できる
③ 利用者主体を実践している施設や事業所を訪問し、個別ケアのありかたを理解できる

［授業の日程と各回のテーマ・内容・授業方法］コマ数

コマ数：３０コマ

【利用者の状態に応じた食事の介助の理解と選択】　１～１０　　大橋　政雄

１．料理の基本の理解
２．調理実習①
３．介護施設の食事の理解
４．調理実習②
５．咀嚼・嚥下対応食の理解
６．調理実習③
７．病院食の理解
８．調理実習④
９．減塩食の理解
１０．調理実習⑤

【介護の現場でのリハビリテーション】　　１１～２０　郷　貴大

１１．リハビリテーションとは
１２．リハビリテーションと介護
１３．介護施設で行われているリハビリテーション・機能訓練
１４．リハビリ専門職（ＰＴ・ＯＴ・ＳＴ）との関わり
１５．人間の基本動作①
１６．人間の基本動作②
１７．関節可動域訓練とは①
１８．関節可動域訓練とは②
１９．疾患別基本技術～生活の中でできるリハビリテーション①～
２０．疾患別基本技術～生活の中でできるリハビリテーション②～

【優良施設から学ぶ個別ケア】　　２１～３０　伊東　美子

２１．優良施設見学の主旨説明・グループ分け
２２．優良施設の概要①
２３．優良施設の概要②
２４．優良施設の概要③
２５．優良施設見学（グループごとに見学）グループ以外は課題対応
２６．優良施設見学（グループごとに見学）グループ以外は課題対応
２７．優良施設見学（グループごとに見学）グループ以外は課題対応
２８．優良施設見学（グループごとに見学）グループ以外は課題対応
２９．優良施設見学（グループごとに見学）グループ以外は課題対応
３０．まとめ

| | |
|---|---|
| ［使用テキスト・参考文献］ | 【介護の現場でのリハビリテーション】<br>見てわかるシリーズ６　実践リハビリ介護学　ＱＯＬサービス |
| ［単位認定の方法及び基準］ | ・教科出席率が 80%以上で、筆記試験 60 点以上 |

# 授　業　概　要

（介護福祉科）

| | | | |
|---|---|---|---|
| 授業科目名<br>介護過程Ⅱ―１ | | 授業の種類（ 講義 ・ 演習 ・ 実習 ） | |
| 授業担当者<br>高橋　良子 | 実務経験 | 老人保健施設、社会福祉協議会、認知症対応型グループホームにて介護業務に従事する。 | |
| 授業の回数<br>15 回 | 時間数（単位数）<br>30 時間（２単位） | 配当学年・時期<br>２年・前期 | （ 必修・ 選択 ） |

［授業の目的・ねらい］

本人の望む生活の実現に向けて、生活課題の分析を行い、根拠に基づく介護実践を伴う課題解決の思考過程を習得する学習とする。

［授業全体の内容の概要］

介護過程の意義・目的及び介護過程の展開の一連のプロセスに関する基礎的理解、介護過程とチームアプローチ、個別事例に通じた介護過程の展開の実際について、介護総合演習や介護実習、生活支援技術等の他科目との連動を視野に入れて、介護過程を展開できる能力を養う。

［授業終了時の達成課題（到達目標）］

① アセスメントから、利用者の生活課題が導きだせることができる
② 生活課題を抽出し、個別介護計画が立案できる
③ 立案した個別介護計画を実践できる
④ 実践したケアについて正しく記録し、評価を行うことができる
⑤ 実習を通して、チームアプローチを理解できる
⑥ 個別の事例を通して、対象者の状態や状況に応じた介護過程の展開ができる

［授業の日程と各回のテーマ・内容・授業方法］コマ数　（15 回までの場合はセル結合）

コマ数：15 コマ

１．個別介護計画の立案について（概要）介護過程の意義と理解　介護過程の展開
２．個別介護計画作成（事例学習）①
３．個別介護計画作成（事例学習）②
４．個別介護計画作成（事例学習）③
５．個別介護計画作成（事例学習）④
６．個別介護計画作成（事例学習）⑤
７．個別介護計画作成（事例学習）⑥
８～１５
帰校日指導（個別介護計画立案）

| | |
|---|---|
| ［使用テキスト・参考文献］ | ・プリント配布 |

| | |
|---|---|
| ［単位認定の方法及び基準］ | ・教科出席率が 80%以上の者に対して、以下の配点による総合点を算出し、学内共通の基準による絶対評価を行う。<br>１．考査点（100%） |

# 授　業　概　要

（介護福祉科）

| | | | |
|---|---|---|---|
| 授業科目名<br>介護過程Ⅱ―２ | | 授業の種類（ 講義 ・ 演習 ・ 実習 ） | |
| 授業担当者<br>高橋　良子 | 実務経験 | 老人保健施設、社会福祉協議会、認知症対応型グループホームにて介護業務に従事する。 | |
| 授業の回数<br>30 回 | 時間数（単位数）<br>60 時間（４単位） | 配当学年・時期<br>２年・後期 | （ 必修・ 選択 ） |

［授業の目的・ねらい］

本人の望む生活の実現に向けて、生活課題の分析を行い、根拠に基づく介護実践を伴う課題解決の思考過程を習得する学習とする。

［授業全体の内容の概要］

介護過程の意義・目的及び介護過程の展開の一連のプロセスに関する基礎的理解、介護過程とチームアプローチ、個別事例に通じた介護過程の展開の実際について、介護総合演習や介護実習、生活支援技術等の他科目との連動を視野に入れて、介護過程を展開できる能力を養う。

［授業終了時の達成課題（到達目標）］

① 介護過程の理論や実践を通して、介護過程が展開できる
② 介護過程を通して、介護観の形成ができる
③ レポート作成を通じて、介護過程の総まとめができる

［授業の日程と各回のテーマ・内容・授業方法］コマ数　（15 回までの場合はセル結合）

コマ数：30 コマ

１．実習Ⅰ―５事前準備
２．実習Ⅰ―５事前準備
３～１３
　レポート作成
１４～１９
　パワーポイント作成
２０～３０
　実習報告会準備

| | |
|---|---|
| ［使用テキスト・参考文献］ | ・プリント配布 |
| ［単位認定の方法及び基準］ | ・教科出席率が 80%以上の者に対して、以下の配点による総合点を算出し、学内共通の基準による絶対評価を行う。<br>１．考査点(100%) |

# 授　業　概　要

（介護福祉科）

<table>
<tr><td colspan="3">授業科目名<br>介護総合演習Ⅱ―１</td><td colspan="3">授業の種類（ 講義 ・ 演習 ・ 実習 ）</td></tr>
<tr><td colspan="2">授業担当者<br>高橋　良子</td><td rowspan="2">実務経験</td><td colspan="3">老人保健施設、社会福祉協議会、認知症対応型グループホームにて介護業務に従事する。</td></tr>
<tr><td colspan="2">授業担当者<br>小林恵太</td><td colspan="3">有料老人ホーム・老人保健施設にて介護業務に従事する</td></tr>
<tr><td>授業の回数<br>15 回</td><td colspan="2">時間数（単位数）<br>30 時間（２単位）</td><td>配当学年・時期<br>２年・前期</td><td colspan="2">（ 必修・ 選択 ）</td></tr>
</table>

［授業の目的・ねらい］

介護実践に必要な知識と技術の統合を行うとともに、介護観を形成し、専門職としての態度を養う学習とする。

［授業全体の内容の概要］

各領域で学ぶ知識と技術の統合、介護実践の科学的探究を通して、介護実習での学びを深化させるとともに、介護の専門職として思考や態度の形成、自己教育力を養う総合的な学習とする。

［授業終了時の達成課題（到達目標）］

① 多職種協働の視点が理解できる
② 様々な実習を通して、自己の課題を明確にし、専門職としての態度を養うことができる
③ 質の高い介護実践やエビデンスの構築につながる実践研究の意義とその方法について理解できる

［授業の日程と各回のテーマ・内容・授業方法］コマ数　（15 回までの場合はセル結合）

コマ数：１５コマ

１．実習Ⅱの概要説明・実習計画書・誓約書の作成
２．実習Ⅱ　実習計画書の作成①
３．実習Ⅱ　実習計画書の作成②
４．実習Ⅱ　記録類の配布と実習前の確認・指導
５．実習記録まとめ
６．実習記録まとめ
７．実習記録まとめ
８．実習記録まとめ
９．実習Ⅰ―４　概要説明　実習計画書・誓約書の作成
１０．実習Ⅰ―４　実習計画書の作成　オリエンテーション内容の確認
１１．実習Ⅰ―４　実習計画書の作成
１２．実習Ⅰ―４　実習計画書の作成
１３．実習Ⅰ―４　記録まとめ
１４．実習Ⅰ―４　記録まとめ
１５．実習Ⅰ―４　記録まとめ

| | |
|---|---|
| ［使用テキスト・参考文献］ | ・参考資料配布<br>・プリント配布 |
| ［単位認定の方法及び基準］ | １．考査点(100%)<br>到達目標の修得状況を測るために、各回で実施した確認テストを編集した期末考査により算出する。 |

# 授　業　概　要

（介護福祉科）

| | | | |
|---|---|---|---|
| 授業科目名<br>介護総合演習Ⅱ―２ | | 授業の種類（ 講義 ・ 演習 ・ 実習 ） | |
| 授業担当者<br>高橋　良子 | 実務経験 | 老人保健施設、社会福祉協議会、認知症対応型グループホームにて介護業務に従事する。 | |
| 授業担当者<br>小林　恵太 | 実務経験 | 有料老人ホーム・老人保健施設にて介護業務に従事する | |
| 授業の回数<br>15 回 | 時間数（単位数）<br>30 時間（２単位） | 配当学年・時期<br>２年・後期 | （ 必修・ 選択 ） |

［授業の目的・ねらい］

介護実践に必要な知識と技術の統合を行うとともに、介護観を形成し、専門職としての態度を養う学習とする。

［授業全体の内容の概要］

各領域で学ぶ知識と技術の統合、介護実探究を通して、介護実習での学びを深化させるとともに、介護の専門職として思考や態度の形成、自己教育力を養う総合的な学習とする。

［授業終了時の達成課題（到達目標）］

① 多職種協働の視点が理解できる
② 様々な実習を通して、自己の課題を明確にし、専門職としての態度を養うことができる
③ 質の高い介護実践やエビデンスの構築につながる実践研究の意義とその方法について理解できる

［授業の日程と各回のテーマ・内容・授業方法］コマ数　（15 回までの場合はセル結合）

コマ数：１５コマ

１．実習Ⅰ―５の概要説明　実習計画書　誓約書の作成
２．実習Ⅰ―５　実習計画書の作成
３．実習Ⅰ―５　実習計画書の作成
４．実習Ⅰ―５　実習計画書の作成
５．実習Ⅰ―５　記録類配布
７～１５　　レポート作成　実習報告会の準備

| | |
|---|---|
| ［使用テキスト・参考文献］ | ・参考資料配布<br>・プリント配布 |
| ［単位認定の方法及び基準］ | ・教科出席率が 80%以上の者に対して、以下の配点による総合点を算出し、学内共通の基準による絶対評価を行う。<br>１．考査点(80%)<br>到達目標の修得状況を測るために、各回で実施した確認テストを編集した期末考査により算出する。 |

# 授　業　概　要

（介護福祉科）

| | | |
|---|---|---|
| 授業科目名<br>介護実習Ⅰ-4，5 | | 授業の種類（　講義　・　演習　・　実習　） |
| 授業担当者<br>伊東　美子 | 実務経験 | 特別養護老人ホームにて介護福祉士として介護業務に従事する。 |
| 授業担当者<br>棚橋　恭子 | 実務経験 | 病院、高齢者施設、障害者支援施設に看護師として従事する。 |
| 授業担当者<br>高橋　良子 | 実務経験 | 介護老人保健施設や訪問介護員として介護福祉士業務に従事する。 |
| 授業担当者<br>山岸　涼子 | 実務経験 | 特別養護老人ホーム、訪問入浴、訪問介護員として介護福祉士業務に従事する。 |
| 授業担当者<br>小林　恵太 | 実務経験 | 有料老人ホーム・老人保健施設にて介護業務に従事する |

| | | | |
|---|---|---|---|
| 授業の回数<br>１日８時間×７日 | 時間数（単位数）<br>56 時間（2 単位） | 配当学年・時期<br>2 年・前後期 | （　必修・　選択　） |

［授業の目的・ねらい］

さまざまな生活の場における利用者個々の生活リズムや個性を理解したうえで、ケアの個別性について理解し、利用者・家族とのコミュニケーションを実践し、生活支援技術の確認を行い、他の専門職等との協働や関係機関との連携を通じたチームの一員としての介護福祉士としての役割について理解する。

［授業全体の内容の概要］

介護実習では、個々の生活リズムや個性を理解するという観点から様々な生活の場において個別ケアを理解し、利用者・家族とのコミュニケーションの実践、介護技術の確認、多職種協働や関係機関との連携を通じてチームの一員としての介護福祉士の役割を理解する。

個別ケアを行うために、個々の生活リズムや個性を理解し、利用者のニーズに沿って利用者ごとの介護計画の作成、実施、実施後の評価、計画の修正といった一連の介護過程を展開し、他科目で学習した知識や技術を統合して、具体的な介護サービスの提供の基本となる実践力を身につける。

［授業終了時の達成課題（到達目標）］

①様々な生活の場においての個別ケアを理解することができる。

②両者・家族とのコミュニケーションの実践、介護技術の確認、多職種協働や関係機関との連携を通じてチームの一員としての介護福祉士の役割について理解することができる。

| | |
|---|---|
| 実習Ｉ－４（２日間）・・・・・２年生前期<br>目　的：訪問介護の特性を学び、利用者の居宅生活を継続するための援助方法を学ぶ。<br>目　標：①居宅における利用者、その家族の生活状況・環境について理解する。<br>②居宅における利用者のニーズと必要なサービスを見学、体験を通して理解する。<br>③施設におけるさまざまな機関との連携や、社会資源の有効な活用方法について知る。<br>達成方法・訪問介護実習は、1 日の実習を 8 時間とし、2 日間を基本とする。<br>・マンツーマン指導を基本とする。<br>・利用者と職員がどのように信頼関係を築いているか観察し理解する。<br>・利用者、家族に対する接し方や援助方法について指導を受ける。<br>・利用者が主体的に暮らせる介護サービスの選択の援助方法を理解する。<br>実習Ｉ－５（５日間）・・・・・２年生後期<br>目　的：2 年間の集大成とするために、介護福祉士として総合的な学習を進めると同時に、就職しても即戦力として働けるような技術・知識を学ぶ。<br>目　標：①施設の中での役割を理解し、組織の立場を理解しながら業務を行うことができる。<br>②利用者や施設職員とも、コミュニケーションが十分にとれるように関わる。<br>③自分自身の専門性を活かし、利用者への支援を総合的に実践する。<br>④自分自身の課題を克服する。<br>達成方法・総合実習は、1 日の実習を 8 時間とし、5 日間を基本とする。<br>・職員が組織の中で、どのように業務を行っているか理解する。<br>・報告、連絡、相談を確実に実施し、信頼関係を構築する。<br>・今まで学習したことを、応用的に実践し、即戦力となれるような技術を実践する。 | |
| ［使用テキスト・参考文献］ | ・介護福祉士養成講座<br>「介護総合演習・介護実習１０」　中央法規<br>・介護実習指導要綱 |
| ［単位認定の方法及び基準］ | ・各実習日程の 80%の出席<br>・実習指導者による評価<br>・担当教員による評価<br>上記を総合的に評価する |

# 授　業　概　要

（介護福祉科）

| | | |
|---|---|---|
| 授業科目名<br>介護実習Ⅱ | | 授業の種類（　講義　・　演習　・　実習　） |
| 授業担当者<br>伊東　美子 | 実務経験 | 特別養護老人ホームにて介護福祉士として介護業務に従事する。 |
| 授業担当者<br>棚橋　恭子 | 実務経験 | 病院、高齢者施設、障害者支援施設、特別養護老人ホームに看護師として従事する。 |
| 授業担当者<br>高橋　良子 | 実務経験 | 介護老人保健施設や訪問介護員として介護福祉士業務に従事する。 |
| 授業担当者<br>山岸　涼子 | 実務経験 | 特別養護老人ホーム、訪問入浴、訪問介護員として介護福祉士業務に従事する。 |
| 授業担当者<br>小林　恵太 | 実務経験 | 有料老人ホーム・老人保健施設にて介護業務に従事する |

| | | | |
|---|---|---|---|
| 授業の回数<br>１日８時間×25 日 | 時間数（単位数）<br>200 時間（5 単位） | 配当学年・時期<br>2 年・前期 | （　必修・　選択　） |

［授業の目的・ねらい］

知識と技術を統合し、介護過程を展開して具体的な介護サービスの提供の基本となる実践力を修得する。さまざまな生活の場における個別ケアの理解を深め、介護福祉士の役割について学ぶ。また、介護過程の展開について実践を通して学ぶ。

［授業全体の内容の概要］

介護実習では、個々の生活リズムや個性を理解するという観点から様々な生活の場において個別ケアを理解し、利用者・家族とのコミュニケーションの実践、介護技術の確認、多職種協働や関係機関との連携を通じてチームの一員としての介護福祉士の役割を理解する。

個別ケアを行うために、個々の生活リズムや個性を理解し、利用者のニーズに沿って利用者ごとの介護計画の作成、実施、実施後の評価、計画の修正といった一連の介護過程を展開し、他科目で学習した知識や技術を統合して、具体的な介護サービスの提供の基本となる実践力を身につける。

［授業終了時の達成課題（到達目標）］

①介護とは何かを理解し、介護を実践する基本的能力を身につける。

②専門職業人として自己をみつめることができる。

［授業の日程と各回のテーマ・内容・授業方法］コマ数　（15 回までの場合はセル結合）

<table>
<tr><td colspan="2">目　的：介護福祉専門職としての価値観を高め、利用者へ総合的な援助を通して、介護計画の立案・実施・評価といった一連の介護過程のすべてを継続的に実践する。<br>目　標：①利用者個々の生活リズムや個別性に応じた生活支援のあり方を理解し、チームの一員として連携し、介護を遂行する能力を養う。<br>②利用者のニーズに応じた介護過程の展開（立案～実施～評価）を継続的に実践できる。<br>③介護福祉士を目指すものとして専門性のあり方を理解するとともに、自分自身の介護観の形成を行う。<br>実習方法・介護過程実習は、1日の実習を8時間とし、２５日間を基本とする。<br>・マンツーマン指導を基本とし習熟度をはかる。<br>・実習先の勤務時間に合わせて、早番・遅番を実施し、日課表に沿った業務の進め方について学ぶ。<br>・夜勤実習を1回実施することで、介護の連続性を理解する。<br>・医療的な援助に関しては見学実習とし、介護チームの一員となるための連携方法を学ぶ。<br>・自立支援へと繋がる援助が提供できるように学び、実践する。<br>・アセスメントツールを用いて、介護計画を立案し、介護チームや他職種と協働で実施し評価する。</td></tr>
<tr><td>［使用テキスト・参考文献］</td><td>・介護福祉士養成講座<br>「介護総合演習・介護実習　１０」　中央法規<br>・介護実習指導要綱</td></tr>
<tr><td>［単位認定の方法及び基準］</td><td>・各実習日程の 80%の出席<br>・実習指導者による評価<br>・担当教員による評価<br>上記を総合的に評価する</td></tr>
</table>

# 授　業　概　要

（介護福祉科）

| | | | |
|---|---|---|---|
| 授業科目名<br>発達と老化の理解Ⅰ | | 授業の種類（ 講義 ・ 演習 ・ 実習 ） | |
| 授業担当者<br>山岸　涼子 | 実務経験 | 特別養護老人ホーム、訪問入浴、訪問介護員として介護福祉士業務に従事する。 | |
| 授業の回数<br>15 回 | 時間数（単位数）<br>30 時間（２単位） | 配当学年・時期<br>２年・前期 | （ 必修・ 選択 ） |

［授業の目的・ねらい］

人間の成長と発達の過程における、身体的、心理的、社会的変化及び老化が生活に及ぼす影響を理解し、ライフサイクルの特徴に応じた生活を支援するために必要な基礎的な知識を習得する。

［授業全体の内容の概要］

介護を必要とする人の理解を深めるため、人間の成長と発達の観点から人の一生について理解する。ライフサイクル各期（乳幼児期、学童期、思春期、青年期、成人期、老年期）における身体的、心理的、社会的特徴と発達を踏まえ、各段階に応じた生活支援のありかたを学ぶ。

［授業終了時の達成課題（到達目標）］

① 人間の成長と発達の基本的な考え方が理解できる
② ライフサイクル各期における身体的、心理的、社会的特徴と発達課題が理解できる
③ ライフサイクル各期の特徴的な疾病について理解できる

［授業の日程と各回のテーマ・内容・授業方法］コマ数　（15 回までの場合はセル結合）

１　成長・発達の考え方
２　成長・発達の原則・法則
３　成長・発達に影響する要因
４　発達理論
５　発達段階と発達課題
６　身体的機能の成長と発達（変化）
７　心理的機能の発達①
８　心理的機能の発達②
９　社会的機能の発達
１０　まとめ
１１　老年期の定義
１２　老化とは
１３　老年期の発達課題①
１４　老年期の発達課題②
１５　老年期をめぐる今日的課題

| | |
|---|---|
| ［使用テキスト・参考文献］ | ・最新　介護福祉士養成講座１２　発達と老化の理解　第２版<br>（中央法規出版）<br>・プリント配布 |
| ［単位認定の方法及び基準］ | ・教科出席率が 80%以上で、筆記試験 60 点以上 |

# 授　業　概　要

（介護福祉科）

| | | | |
|---|---|---|---|
| 授業科目名<br>発達と老化の理解Ⅱ | | 授業の種類（ 講義 ・ 演習 ・ 実習 ） | |
| 授業担当者<br>山岸　涼子 | 実務経験 | 特別養護老人ホーム、訪問入浴、訪問介護員として介護福祉士業務に従事する。 | |
| 授業の回数<br>15 回 | 時間数（単位数）<br>30 時間（２単位） | 配当学年・時期<br>２年・後期 | （ 必修・ 選択 ） |

［授業の目的・ねらい］

人間の成長と発達の過程における、身体的、心理的、社会的変化及び老化が生活に及ぼす影響を理解し、ライフサイクルの特徴に応じた生活を支援するために必要な基礎的な知識を習得する。

［授業全体の内容の概要］

介護を必要とする人の理解を深めるため、人間の成長と発達の観点から人の一生について理解する。ライフサイクル各期（乳幼児期、学童期、思春期、青年期、成人期、老年期）における身体的、心理的、社会的特徴と発達を踏まえ、各段階に応じた生活支援のありかたを学ぶ。

［授業終了時の達成課題（到達目標）］

① 老化に伴う身体的・心理的・社会的な変化や高齢者に多くみられる疾病が理解できる

② 老化に伴う、生活への影響、健康の維持、増進を含めた生活の支援が理解できる

［授業の日程と各回のテーマ・内容・授業方法］コマ数

１　老化に伴う身体的な変化と生活への影響①
２　老化に伴う心理的・社会的な変化と生活への影響②
３　高齢者の症状・疾患の特徴①
４　高齢者の症状・疾患の特徴②
５　高齢者に多い疾患・症状と生活上の留意点①
６　高齢者に多い疾患・症状と生活上の留意点②
７　高齢者に多い疾患・症状と生活上の留意点③
８　高齢者に多い疾患・症状と生活上の留意点④
９　高齢者に多い疾患・症状と生活上の留意点⑤
１０　高齢者の健康・保健医療者との連携
１１　老化に伴う心理的な変化と生活への影響①
１２　老化に伴う心理的な変化と生活への影響②
１３　老化に伴う社会的な変化と生活への影響①
１４　老化に伴う社会的な変化と生活への影響②
１５　まとめ

| | |
|---|---|
| ［使用テキスト・参考文献］ | ・最新　介護福祉士養成講座１２　発達と老化の理解　第２版<br>（中央法規出版）<br>・プリント配布 |
| ［単位認定の方法及び基準］ | ・教科出席率が 80%以上で、筆記試験 60 点以上 |

# 授　業　概　要

（介護福祉科）

| | | | |
|---|---|---|---|
| 授業科目名<br>医療的ケアⅡ | | 授業の種類（ 講義 ・ 演習 ・ 実習 ） | |
| 授業担当者<br>棚橋　恭子 | 実務経験 | 病院、介護老人保健施設、准看護師とし従事し<br>訪問看護ステーション、障害者支援施設、特別養護老人ホームに看護師として従事した。 | |
| 村田　有 | 実務経験 | 小規模多機能居宅介護等で看護師として看護業務に従事する。 | |
| 授業の回数<br>２４回 | 時間数（単位数）<br>４８時間（３単位） | 配当学年・時期<br>２年・前期 | （ 必修・ 選択 ） |

［授業の目的・ねらい］

「個人の尊厳と自立」「医の倫理」について医療的ケアを行う立場のたつ専門職としての心構えを形成する。人の生命に直接関係する行為であることの意義と自覚について説明できる。

［授業全体の内容の概要］

医療職との連携の下で医療的ケアを安全・適切に実施できるよう、必要な知識・技術を習得する。医療的ケアを初めて学ぶ学生が「なぜ医療的ケアを学ぶのか」についてしっかり理解するために解剖生理学的な基礎知識から喀痰吸引、経管栄養実施の基礎的知識、実施手順、留意点、緊急時対応など実践的な知識・技術を学び、その上で医療的ケアを安全かつ適切に実施できるよう基礎的知識を身につける。

［授業終了時の達成課題（到達目標）］

１「喀痰吸引」「経管栄養」を安全に実施するための基礎知識を習得し説明できる。

２　個人の尊厳と自立について理解し、利用者の尊厳を守り、自立を助ける医療的ケアの実践ができる。

３　利用者の自己決定の権利・個人情報の保護、利用者や家族に対する説明と同意の意味を説明できる。

［授業の日程と各回のテーマ・内容・授業方法］コマ数

| | |
|---|---|
| 高齢者及び障碍児・者の「喀痰吸引」概論【１～６】 | |
| １．喀痰吸引とは | １６．喀痰吸引　実施手順④<br>吸引の技術と留意点 |
| ２．人工呼吸器と吸引　① | １７．喀痰吸引　実施手順⑤<br>吸引の技術と留意点 |
| ３．人工呼吸器と吸引　② | １８．喀痰吸引に必要な報告と記録⑥<br>高齢者及び障碍児・者の「喀痰吸引」概論実施手順【１９～２４】 |
| ４．こどもの吸引 | １９．経管栄養　実施手順①<br>器具、機材のしくみ、清潔保持 |
| ５．吸引を受ける利用者への説明、同意 | ２０．経管栄養　実施手順② |

| | |
|---|---|
| 観察項目<br><br>６．急変、事故発生時の対応と事前対策<br><br>高齢者及び障碍児・者の「喀痰吸引」概論【７～１２】<br>７．消化器の解剖と働き<br><br>８．経管栄養とは<br><br>９．経管栄養実施上の留意点<br><br>１０．注入する内容に関する知識<br><br>１１．経管栄養を受ける利用者・家族の気持ち説明と同意<br><br>１２．急変、事故発生時の対応と事前対策<br><br>高齢者及び障碍児・者の「喀痰吸引」概論実施手順【１３～１８】<br>１３．喀痰吸引　実施手順①<br>器具、機材のしくみ、清潔保持<br><br>１４．喀痰吸引　実施手順②<br>吸引の技術と留意点<br><br>１５．喀痰吸引　実施手順③<br>吸引の技術と留意点 | 経管栄養の技術と留意点<br><br>２１．経管栄養　実施手順②<br>経管栄養の技術と留意点<br>２２．経管栄養　実施手順③<br>経管栄養の技術と留意点<br>２３．経管栄養　実施手順④<br>経管栄養の技術と留意点<br>２４．経管栄養に必要な報告と記録 |

| | |
|---|---|
| ［使用テキスト・参考文献］ | 最新介護福祉士養成講座１５「医療的ケア」<br>プリント |
| ［単位認定の方法及び基準］ | ・教科出席率が 80%以上で、筆記試験 60 点以上 |

# 授　業　概　要

（介護福祉科）

| | | | |
|---|---|---|---|
| 授業科目名<br>医療的ケアⅢ | | 授業の種類（　講義　・　演習　・　実習　） | |
| 授業担当者<br>棚橋　恭子 | 実務経験 | 病院、介護老人保健施設、准看護師とし従事し訪問看護ステーション、障害者支援施設、特別養護老人ホームに看護師として従事する。 | |
| 授業担当者<br>元井　信明 | 実務経験 | ケアサポート長岡等で看護師として看護業務に従事する。 | |
| 授業担当者<br>村田　有 | 実務経験 | 小規模多機能居宅介護等で看護師として看護業務に従事する。 | |
| 授業の回数<br>21 回 | 時間数（単位数）<br>42 時間（　1 単位） | 配当学年・時期<br>2 年・後期 | （　必修・　選択　） |

［授業の目的・ねらい］

「喀痰吸引」「経管栄養」は医行為である。利用者に対して医療提供上の危機管理を踏まえて安全に提供されなければならない。基礎知識を習得し、安全に 1 人で実施できる技術を学び実践できる。

［授業全体の内容の概要］

医療的ケアⅠ、Ⅱでは医療職との連携の下で医療的ケアを安全・適切に実施できるよう、必要な知識、技術を習得した。医療的ケアⅢでは、喀痰吸引、経管栄養について根拠に基づく手技が実施できているか、これまで学習した内容の理解が実践で安全かつ適切に実施できるか評価する。演習では、利用者に実施するわけではなくシュミレーターを使用するためか、今一つ気持ちが入りずらいのが学生の特徴ともいえる。その中でシュミレーターであっても人の尊厳を守り、その方の立場にたった気持ちに寄り添えるケアを実施できているかという点も含め評価していく。

［授業終了時の達成課題（到達目標）］

1・「喀痰吸引」「経管栄養」を安全に実施するための基礎知識を学び実践できる。

2・シュミレーターを使用し、「喀痰吸引」「経管栄養」の実際の技術を実践できる。

3・「喀痰吸引」「経管栄養」の基本的な技術を 1 人で実施することができる。

［授業の日程と各回のテーマ・内容・授業方法］コマ数

| | |
|---|---|
| 1．「喀痰吸引」口腔内　演習① | 16．「経管栄養」胃ろうによる経管栄養演習① |
| 2．「喀痰吸引」口腔内　演習② | 17．「経管栄養」胃ろうによる経管栄養演習② |
| 3．「喀痰吸引」口腔内　演習③ | 18．経管栄養」胃ろうによる経管栄養演習③ |
| 4．「喀痰吸引」口腔内　演習④ | |
| 5．「喀痰吸引」口腔内　演習⑤ | |

| | |
|---|---|
| ６．「喀痰吸引」鼻腔内　演習①<br><br>７．「喀痰吸引」鼻腔内　演習②<br><br>８．「喀痰吸引」鼻腔内　演習③<br><br>９．「喀痰吸引」鼻腔内　演習④<br><br>１０．「喀痰吸引」鼻腔内　演習⑤<br><br>１１．「喀痰吸引」気管カニューレ内部　演習①<br><br>１２．「喀痰吸引」気管カニューレ内部　演習②<br><br>１３．「喀痰吸引」気管カニューレ内部　演習③<br><br>１４．「喀痰吸引」気管カニューレ内部　演習④<br><br>１５．「喀痰吸引」気管カニューレ内部　演習⑤ | １９．経管栄養」胃ろうによる経管栄養<br>演習④<br><br>２０．経管栄養」胃ろうによる経管栄養<br>演習⑤<br><br>２１．「経管栄養」経鼻経管栄養　演習①<br><br>２２．「経管栄養」経鼻経管栄養　演習②<br><br>２３．「経管栄養」経鼻経管栄養　演習③<br><br>２４．「経管栄養」経鼻経管栄養　演習④<br><br>２５．「経管栄養」経鼻経管栄養　演習⑤ |

| | |
|---|---|
| ［使用テキスト・参考文献］ | 最新介護福祉士養成講座１５「医療的ケア」<br>プリント |
| ［単位認定の方法及び基準］ | ・教科出席率が 80%以上の者に対して、以下の配点による総合点を算出し、学内共通の基準による絶対評価を行う。<br>実技試験により評価する。<br>１．各項目（喀痰吸引・経管栄養）・回数を（5 回以上）行う。試験は 5 回目で実施した時点で行い合格したものは 100%とする。6 回目、7 回目と再試験を行う度に−10%で算出する。<br>（6 回目 90 点　・7 回目 80 点　　・8 回目 70 点） |